

JOURNAL OF MONGOLIAN STUDIES
モンゴル研究

No. 34

《調査報告》

2025年のツエルゲル、「地域からの地域研究」の胎動

— 設立100周年を迎えたバヤンホンゴル県ボグド郡を2度訪問して —

今岡 良子

《創刊50周年に寄せて》

モンゴル文学100年と日本におけるモンゴル文学研究50年

その道程、現在地、そして危機と新たな道

芝山 豊

《翻訳》

Д.ナツアグドルジ 「ヒュルヒュル風」

(訳) 織田 幸彦

Д.ナツアグドルジ 「すべての子供たちよ(ピオネール唱歌)」 (訳) 織田 幸彦

Д.ナツアグドルジ 「お母さん」

(訳) 織田 幸彦

昔話 「手なし娘」

(訳) 吉本るり子

《雑感》

モンゴル小周遊記

曾 芳子

チョコレート包装のイラストに見る「モンゴル意識」

三上喜美男

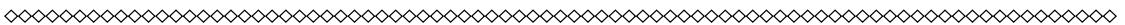
《活動報告》

活動報告(2025年)

今岡 良子・内田 敦之

モンゴル研究会

大阪
2025



目 次

2025 年

『モンゴル研究』第 34 号

《調査報告》

2025 年のツエルゲル、「地域からの地域研究」の胎動

— 設立 100 周年を迎えたバヤンホンゴル県ボグド郡を 2 度訪問して —

..... 今岡 良子 1

《創刊 50 周年に寄せて》

モンゴル文学 100 年と日本におけるモンゴル文学研究 50 年

その道程、現在地、そして危機と新たな道 芝山 豊 25

《翻訳》

Д.ナツアグドルジ「ヒュルヒュル風」 (訳) 織田 幸彦 44

Д.ナツアグドルジ「すべての子供たちよ(ピオネール唱歌)」 (訳) 織田 幸彦 45

Д.ナツアグドルジ「お母さん」 (訳) 織田 幸彦 47

昔話「手なし娘」 (訳) 吉本るり子 48

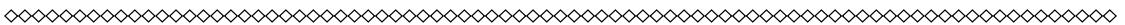
《雑感》

モンゴル小周遊記 曽芳子 51

チョコレート包装のイラストに見る「モンゴル意識」 三上喜美男 58

《活動報告》

活動報告(2025 年) 今岡 良子・内田 敦之 62



《調査報告》

2025年のツェルゲル、「地域からの地域研究」の胎動 — 設立100周年を迎えたバヤンホンゴル県ボグド郡を2度訪問して —

今岡 良子

筆者は、1989年に「日本モンゴル共同遊牧地域調査隊」の一員として初めてバヤンホンゴル県ボグド郡を訪ね、1990年から1994年にかけて「日本モンゴルゴビ遊牧地域研究開発調査（以下、「ゴビプロジェクト」と略す）」の隊員として、1995年以降は一人で毎年訪問してきたが、コロナ禍で中断し、最後に訪れたのは2019年となった。コロナの感染拡大を封じるためにとったモンゴル政府の国境閉鎖は非常に素早く、その後、新型の株が豹変する度、国境の開閉を気にしなければならなかった。モンゴルに渡航できない間、女性史家E.チメッドツェレンの著作の翻訳に集中し、ウランバートルで開かれる国際モンゴル学者会議やモンゴル国立大学内の学術会議でその内容を発表するにとどまった。昨年2024年は、ボグド山が見えるところまで近づきたいと思い、オングリ川のスタディーツアーに参加し、ウムヌゴビ県のオラーン湖からオングリ川に沿って遡り、ドンドゴビ県、ウブルハンガイ県の源流地域の近くまで移動した。遠くから東ボグド山の方を見て、山頂の冷涼な夏营地を思い出すにとどまった。

しかし、そのリバウンドのように、2025年には、2度、ボグド郡へ行く機会を得た。1度目は、5月にボグド郡設立100周年記念に向けた学会がボグド郡中心地で開かれ、31人の研究者がウランバートルから現地入りする一行に加えていただいた。しかし、郡の中心地から東ボグド山を眺めるに終わり、どうしても東ボグド山ツェルゲルに行きたいという思いを強くした。2度目は、8月に、首都、県や郡の中心地で知人に支えられて、ツェルゲルまで辿り着くことができ、夏营地で遊牧している人々と再会を果たすことができた。5年ぶりであった。

本論では、その2回の訪問の報告をまとめ、地域から地域研究が始まっていること、それに関連した出版された書籍を紹介する。

(1) 2025年5月の訪問(4月28日から5月6日まで)

(1.1) 経緯

5月のモンゴル行きは、前年の10月25日から30日にウランバートルに滞在したことがきっかけになる。

2024年10月29日にモンゴル国立大学の図書館ホールで、女性史家E.チメッドツェレン生誕100周年記念の学術会議と出版記念会が開かれることになった。筆者は外国人で、チメッドツェレンの本の翻訳をしているということで招待され、チメッドツェレンが、党50周年記念の『モンゴル人民共和国における女性解放の歴史』という本を執筆するため、当時まだ名誉回復されていなかったD.パグマラムについて詳しく調査し、そこに記述したことの意義について発表した。ご遺族や弟子で、ホールはいっぱいになっていた。

図1 E.チメッドツェレン生誕100周年記念
の招待状



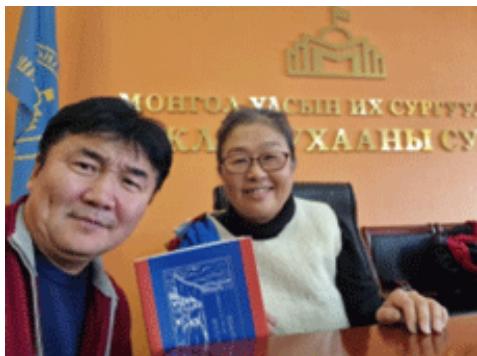
図2 出版記念会の招待状



モンゴル女性組織設立100周年記念にモンゴルの女性組織が発行した雑誌をキリル文字で再発行した。

チメッドツェレンがその本の中で使ったモンゴルの女性組織の雑誌(1925年から1936年にかけて発行されたもの)が、国立文書館だけでなく、国立図書館や個人宅に散在していたので、B.トウブシントウグス(現在大阪大学人文学研究科特任教員、モンゴル国立大学教授)が収集し、そこに書かれたモンゴル文字の文章をキリル文字に転写する作業をモンゴル国立大学の院生が分担し、一冊の本を出版した。その出版記念会をチメッドツェレン生誕記念の学術会議の前に開催した。そこにはゴビプロジェクトの時代からお世話になったT.ムンフツェツエグ(モンゴル国立大学名誉教授)が参加し、出

写真1 S.ボルドバータルと筆者



2024.10.29.撮影 S.ボルドバータル

版記念会は女性史に関するものだが、今岡のこれまでの調査研究は、40年を迎えるとするボグド郡における遊牧社会の調査研究である、と紹介してくれた。

その時に知り合ったのが、S.ボルドバータル(モンゴル国立科学技術大学社会人文学部教授)で、同じバヤンホンゴル県のジンスト郡出身だと言う。この写真のS.ボルドバータルが、声をかけてくれて、5月のボグド郡での会議に参加することができた。モンゴルの社会は、こういう繋がりが次の扉を開いてくれることがある。

実は、ボグド郡の会議には、他にも外国からzoomで発表する人もいるということで、筆者もそうするだろうと思われていた。しかし、筆者は何としてもボグド郡に行きたかった。7月のナーダムの頃の100周年記念には授業があるため参加できないので、その前の5月に行って、お祝いを述べたかった。この時期なら、4月末からゴールデンウィークが始まり、大学あげての大学祭が行われるので授業が休講になる。筆者にとっては5年ぶりにボグド郡に行けるチャンスであった。一緒にボグド郡に行きたいと申し出ると、大歓迎された。

モンゴル人民共和国宣言が1924年であるため、昨年の2024年から地方の各地で地方行政設立100周年記念が行われ、ボグド郡は2025年に100周年を迎えることになった。1995年の30年前の70周年記念の時は、7月のナーダムを普段より盛大に祝って楽しんでいたが、今回は、その2ヶ月前に、学術会議が開催されることになった。そのテーマは、「ハルハ・サイン・ノヨン・ハン盟エルデネ・バンディド部ラミン・ゲゲーンの弟子とバヤンホンゴル県ボグド郡」という。

(1.2) 「ハルハ・サイン・ノヨン・ハン部エルデネ・バンディド旗ラミン・ゲゲーン・シャビとバヤンホンゴル県ボグド郡」学術会議の概要

この学術会議を発案したのは、研究機関ではなく、ボグド郡行政でもなく、ボグド郡の住民であった。ボグド郡だけでも38年に渡り、数学や物理の教育者として貢献したI.チャグナードルジ(北極星勲章受賞者¹⁾)と妻J.ドラム、そして実務は高等教育を受け、ウランバートル在住の4人の娘、セムジッド、ハンドマー、ポンサルドラム、レンツェンハンドが担当し、それぞれの子どもたちがよく動いてサポートした。このように、住民が必要と考え、企画実施された学術会議が開催された意義については、改めて後に書きたいと思う。

学術会議開催の目的は、ボグド郡は全国的に見ても、研究者を多く輩出した郡である。100周年記念の祭りを盛大に行うだけでなく、このボグド郡で生まれ、教育を受け、モンゴルの科学技術の発展に貢献した先輩たちの功績を修学中の若い人たちに伝えておきたいということであった。だから、首都ではなく、首都から700km離れたボグド郡で、そして、その中心の文化会館で、子どもからお年寄りまでに開かれた形式で学術会議が開催された。

5月1日7時、ウランバートルのスフバータル広場の長距離バスの出発地点に集合したのは、報告者の31人とチャグナードルジとドラムの一家であった。そのバスは、首都から西へ向かい、ウブルハンガイ県都アルバイヘルを過ぎたところから南下し、ボグド郡を目指した。ボグド郡の中心地にはトウイン川がオログ湖に注ぐ寸前の下流が流れている、降水量の多い年はトラクターでジープを引っ張らないと渡れなかつたが、新しいコンクリート製の橋ができていた。橋の手前には、郡の代表が乗るジープがライトを照らして待機していて、私たちのバスに乗り込み、乳製品を振るまい、歓迎をしてくれた。その後、簡易宿泊所に泊まる人、知人の家に向かう者、それぞれ分散して、およそ700kmの10時間を越える旅を終えた。

1) 2015年、バヤンホンゴル県の発展に貢献した48人に労働赤旗賞、北極星賞を授与したリストにI.チャグナードルジの名前がある。<http://khural.mn/n/83655#!> 2015年12月28日付け

写真2 ボグド郡に向かう発表者ら



2025.05.01. 撮影 S. ポルドバータル

会議の発表者は、31人。モンゴル国立大学、国立科学技術大学エネルギー工学部、地質学・鉱学部、社会人文学部、モンゴル国立教育大学、国境防衛本部、諜報本部、考古学研究所、天文・地質学研究所、植物研究所などに所属し、歴史学、考古学、人文学、社会学、地理学、文化、芸術、地化学、地震学、化学、植物の保護、自然環境の保護などを専門としている学者、そして、日本から筆者であった。ボグド郡出身の研究者がボグド郡について自分の専門から発表したり、ボグド郡出身の研究者の功績を後継者が発表したり、ボグド郡に関するテーマについて研究している専門家が発表した。

ボグド郡で生まれ、郡の中心地で教育を受けた後、ウランバートルで高等教育を受け、モンゴル社会を牽引する科学者になった人としては、文芸評論家のS.ロブサンワンダン(1932年生まれ。ゴビプロジェクトの発案者)、化学の基礎を築いたJ.アムガラン(1939年東ボグド山生まれ)、「私の母はラクダ飼い」で有名な作曲家芸術功労者Ch.サンギドルジ(1939年生まれ)、地質・鉱学のJ.ビヤンバ(1940年生まれ)、教育学のL.ジャムツ(1940年生まれ)、砂漠地理学T.バーサン(1944年生まれ。ゴビプロジェクトの参加者)、モンゴルで最初の人類学者D.トゥメン(1946年生まれ)、自然環境学、環境省副大臣のTs.シーレブダンバ(1954年生まれ)について後継の研究者が報告した。骨の研究で有名な人類学者D.トゥメンは、今回の学術会議の参加者でもあった。名前に下線を引いた人は、ボグド郡の百周年記念に郡が発行した『イフ・ボグドの人々』にも掲載されている。

(1.3) 「ハルハ・サイン・ノヨン・ハン部エルデネ・バンディダ旗ラミン・ゲゲーンの弟子とバヤンホンゴル県ボグド郡」という学術会議の特徴

筆者が初めてモンゴルを訪問したのが、日本とモンゴルの研究者が参加する共同調査であり、1990年に始まったゴビプロジェクトにおいては、自然科学者が多く、社会科学の参加者が少なかった。その背景には、党が方針を示した範囲内での研究テーマという点では自然科学も、社会科学もよく似た状況にあったが、社会科学の方が政治的制限を強く受け、国立古文書館等が現在のように自由に利用できず、地方での調査研究には費用がかかる当時、社会学者が、自らテーマを選び、真理の探究を

通じて国民の目を開く知的活動をする状況になかった。また、首都ウランバートルと地方遊牧社会のインフラの格差は大きく、地方の地域社会のために研究する意欲が湧きにくいくことも、ある意味仕方がないことだと考えていた。

しかし、35年も経つと、状況も変わり、研究者も、研究対象とされてきた人々も、意識が変わった。研究者は、国立古文書館の情報公開が進み、地方の調査に必要な研究費を得られるようになり、その研究成果を当該地域の住民と供給したい。ボグド郡出身者や住民は、100周年を記念に、改めて自分たちの地域社会の歴史を知りたい。故郷を離れて、県の中心地や首都、外国に住む子どもや孫の世代にも聞かせておきたい。そのような両者の希望は、今回の発表テーマに表れている。紙面の都合上、その全てを紹介することはできないが、3つの特徴を紹介したい。

1つ目の特徴は、ボグド郡を1925年以降の100年の歴史、それによって区切られた行政区画の範囲で考えていないということである。

この学術会議の名前は、「ハルハ・サイン・ノヨン・ハン部エルデネ・バンディダ旗ラミン・ゲゲーン（ロブサンダンザンジャンツアン）の弟子とバヤンホンゴル県ボグド郡」というテーマである。ハルハ・サイン・ノヨン・ハン部のエルデネ・バンディダ旗の位置は、図3の赤いところで、図4の現在のバヤンホンゴル県の北からエルデネツォグト郡、ウルジート郡、ボグド郡、バヤンゴビ郡にあたる。

ラミン・ゲゲーン（ロブサンダンザンジャンツアン）は、ウンドゥル・ゲゲーン・ザナバザルの弟子であった。1639年に生まれ、5歳で仏門に入り、17歳の時、チベットで学び、第5代目のダライ・ラマの弟子となった。哲学や文学、天文学や医学に長け、特に、東洋の学術、特に伝統医学に力を入れ、

図3 ハルハ・サイン・ノヨン・ハン部のエルデネ・バンディダ旗の位置



出典：Д.Мөнх-Очир(2025),Сайн ноён хан аймгийн Эрдэнэ Бандид Хутагтын шавь(Ламын гэгээнийхэн,УБ)の表紙

図4 現在のバヤンホンゴル県の地図上のエルデネ・バンディダ旗の位置



出典：Д.Мөнх-Очир(2025),Сайн ноён хан аймгийн Эрдэнэ Бандид Хутагтын шавь(Ламын гэгээнийхэн,УБ)の裏表紙

モンゴルで初めて医学の学校を設立した人であった。

17世紀に学識豊かな高僧ラミン・ゲゲーンが生まれたサイン・ノヨン・ハン部エルデネ・バンディダ旗、その宗教的祭祀は、古来信仰の対象としてきたイフ・ボグド山で行われた。このような歴史と文化のあるボグド郡が、100年前に設立され、その弟子とも言える多くの学者を生んだ。100周年を記念し、その成果をボグド郡民、若い人々と共有するのだという意気込みが伝わってくる学術会議のタイトルである。

筆者が、初めてボグド郡を訪問した頃、郡の代表は、郡の面積、人口、家畜頭数と話を進め、ラミン・ゲゲーンのこと、エルデネ・バンディダ旗のことについて触れなかった。ましてや、最初の医学の学校が設立されたことも語らなかった。もし、そのことを知つていれば、その歴史の文脈の中に位置付けて、東ボグド山ツェルゲルの遊牧民が学校を切望し、1993年に分校が設立したことを小貫雅男が書いていたであろう²⁾。

2つの特徴は、発表者は、国立古文書館等の資料をもとにしたボグド郡の歴史を住民と共有しようという意欲に満ちていたということである。

今回の学術会議のトップを飾ったS.ユンデンバト（国立文化芸術大学、文化功労者）は、「ラミン・ゲゲーン（エルデネ・バンディダ旗）の歴史とイフ・ボグド山の宗教行事の伝統」というテーマで報告した。彼は、ゴビプロジェクト発足時の協力者であったが、当時、ボグド山に関する伝説や宗教行事の話をすることはなかった。

D.ロブサンドルジ（国立教育大学、歴史学）はエルデネ・バンディダ旗の領地の範囲について、D.ムンフオチル（学術功労者、歴史学）は、エルデネ・バンディダ旗の1925年の人口について、Kh.ムンフバヤル（国立科学技術大学社会人文学部、歴史学）はエルデネ・バンディダ旗からどのように行政区画を変更し、ボグド郡を編成したか、そのプロセスについて報告した。

Sh.ナサンバト（諜報センター研究員）は、1930年代のラミン・ゲゲーンの弟子たちに対する肅清について、N.ダワードルジ（国境警備軍国境史研究員）は、ハルハ川戦争に参加したボグド郡出身兵士について報告した。Kh.バトエルデネ（国立中央文書館研究員）は、1940年から1957年、つまり、ネグデルが設立される前の牧民経営の実態を発表した。

1990年代初めに行ったゴビプロジェクトは、遊牧民が自分の住む地域社会をどのように変えていきたいか、という主体性に主要な関心があり、東ボグド山ツェルゲルでヘセグ長B.バドツエンゲルを中心とした地域おこしの活動を知り、ボグド郡を定点調査地域に選んだ。ラミン・ゲゲーン（ロブサンダンザンジャンツアン）の存在を知らず、それとは関係なくボグド郡を選んだのだが、ボグド郡出身の学者が多いこと、遊牧民が分校設立を実現させたことなど、ラミン・ゲゲーンとの関わりから解き明かす必要を痛感した。

筆者らの社会研究班は、農牧業ネグデル改革とその後の解体、独立遊牧民家族経営によるホルショーの設立の動きを把握することで精一杯であった。社会主义の時代、モンゴルで禁止されていた宗教活動や非科学的であると評価されなかった地域レベルでの神話や伝説について丁寧な聞き取りができなかつた。ましてや、30年代の大肅清の問題やハルハ川戦争の兵士のライヒストリーなども、手を伸ばせる状況にはなかつた。

ボグド郡はいったいどこにあるのか？ボグドという名前の由来は何か？という地域研究の基礎とな

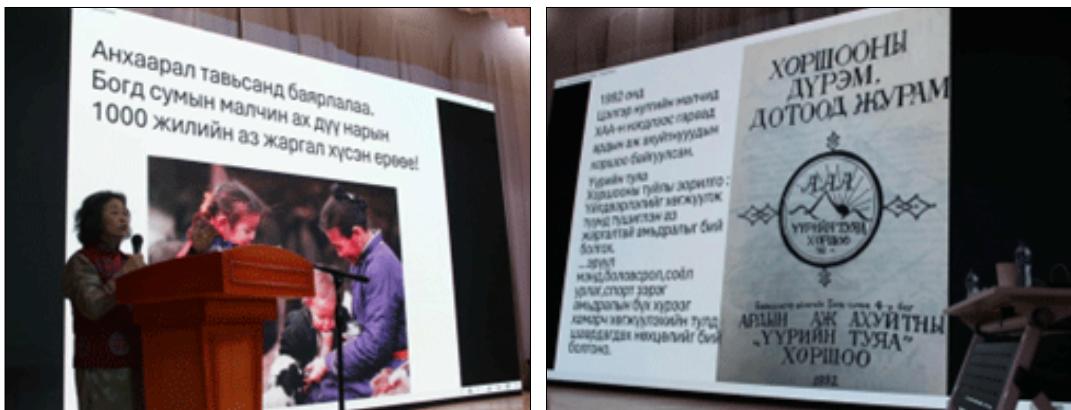
2) Ламын гэгээний хийд <https://montsame.mn/mn/read/222942>

る問い合わせ古文書の資料や地図を示しながら次々と報告され、2日間の30を越える発表に退屈する暇はなかった。これまで様々な学術会議に参加したが、こんなに面白い学会に参加したのは初めてであった。やはり、地域を共有し、それぞれの専門から研究者が語ることで、内実を持った総合研究が成立する。まるで、夢を見ているかのような2日間であった。

(1.4) ボグド郡の学術会議の終わりに

ボグド郡で長年郡長など郡行政を指導してきたO. ドラムドルジは、妻のI. ヨンドンダシとともに、現在はウランバートルに住んでいる。夏の間は夫婦でボグド郡に帰り、郡中心地からそう遠くない夏营地にゲルを立て、家畜の世話をし、乳製品を作り、冬の食料の準備をする。今年はボグド郡設立100周年記念のナーダムもあり、忙しい日々を送っていた。彼らはウランバートル西部のトルゴイトからバスに乗り、会議の二日目に登壇し、「この学術会議が新しい始まりになる」と締め括った。筆者もそう思った。確かに、これはボグド郡における新しい地域研究の始まりである。

写真3 ボグド郡の文化会館で開かれた「ハルハ・サイン・ノヨン・ハン部エルデネ・バンディダ旗ラミン・ゲゲーンの弟子とバヤンホンゴル県ボグド郡」学術会議の様子



(1.5) 5年ぶりの再会

筆者は、この学術会議のプログラムが示すように、発表の時間を2度いただいた。しかし、発表者の熱のこもった話は時間をオーバーし、時間通り進まないため、司会者に2回分の発表をまとめて、2回目に話すことを伝えた。すでに、配布資料は日本で印刷して持ってきていたので、1回目の発表内容は読んでもらうこととした。

2回目の時間に話した内容の要点は次のようになる。

まず、1989年から1998年まで、ボグド郡東ボグド山ツェルゲルにおいて、農牧業ネグデルを解体し、独立遊牧民家族経営によるホルショーを設立したプロセスを共有した。最近「ホルショー」という言葉がよく聞かれるようになったが、それは資金を貸し出す金融面の活動をするホルショーのことである。ツェルゲルで設立されたホルショーは、分校を設立し、それをともに支えることを軸に展開していくので、分校が閉鎖されるまでは、市場経済の波をなんとか乗り越えていたと考えている。ツェルゲルの遊牧民が考え、議論し、生み出したホルショーとは何だったのか？それをもう一度思い出してほしい。司会者にホルショーの規約をモンゴル語で読み上げてもらい、小貫雅男監督のドキュメンタリー映画「四季 遊牧—ツェルゲルの人々 1992年秋から1993年秋まで—」の最後に一年間を回想するシーンを10分ほど見てもらった。そして、ウーリントヤー(曙光)ホルショーがモンゴルにおいて先進的な存在であったこと述べた。

文化会館に集まった人の中には知人³⁾の顔もあった。郡中心地に家を構える知人(故トーフガイの妻ロギオ、故トーフガイの妹で、故ドンドブの妻のゲレルマー、故トゴバトの妻、故ダシニヤム医師の息子、ツォグウォーら)、中心地に母と学童が住み、東ボグド山中には父と年長の子弟が住んでいる知人(今は県の中心地に住むダンバの次男ガナーの妻)、東ボグド山での仕事を放っておいて、会いにきてくれた知人(故サンダンホルローの娘シェレーと夫のシャグダル)がいて、筆者の発表を聞いてくれた。映画「四季 遊牧」の最後の回想シーンには、会場から笑ったり、驚いたり、大きなアクションがあった。1992年秋から1993年秋にかけての思い出深いシーンを見て、もっと映画を見たいという要望があった。この映画は小貫雅男が100時間以上様々な家族を撮影したが、映画としては、バトツェンゲル家、フレルトゴー家、アディヤスレン家、サンギツエベゲ家を中心に、ネグデルから離脱し、ホルショーを結成することを主な筋にして、伊藤恵子と一緒に7時間40分に編集したものである。当時の自分と家族が写っているはずだから、その姿を映像で見たいと言う希望が寄せられた。休憩時間だけでは旧交を温める時間が足りず、その日のプログラムが終わった後、知人宅を訪ねて回った。

筆者はボグド郡に来る前、ウランバートルで東ボグド山ツェルゲルのリーダーであったバトツェンゲルに会っていた。ウランバートルに住む次女ハンドからうちで双子の孫の世話をしてくれていると聞いたからだ。ボグド郡の学術会議で配布する発表の資料を渡し、意見を聞きたかった。バトツェンゲルは、資料に目を通し、「ロギオ姉さんがツェルゲルの歴史を本にしたいと言っていたが、これを元に書いたらいい。ロギオ姉さんにも手渡すように」と言った。

そのアドバイスの通り、郡の中心地に暮らすロギオさんを訪ねた。ロギオは「ボグド郡は100周年記念の歴史の本を準備している。東ボグドの私たちは、私たちの歴史を本にしたい」と言った。この言葉が、8月の訪問につながっていく。

3) 敬称の「さん」は一律つけないことにした。夫婦の場合は、筆者と付き合いが長い人を先に書くことにする。また、亡くなつた方には、名前の前に「故」とつけることにする。

図5 「ハルハ・サイン・ノヨン・ハン部エルデネ・バンディダ旗ラミン・ゲゲーンの弟子とバヤンホンゴル県ボグド郡」のプログラム

**БАЯНХОНГОР АЙМГИЙН БОГД СУМЫН 100 ЖИЛИЙН ОЙД ЗОРИУЛСАН
ЭРДЭМ ШИНЖИЛГЭЭНИЙ ХҮРЛҮН ХОТОЛБОР**



**ХАЛХЫН САЙН НӨЁН ХАН АЙМГИЙН
ЭРДЭНЭ БАНДИД ХУТАГТ ЛАМЫН ГЭГЭЭНИЙ ШАВЬ БА
БАЯНХОНГОР АЙМГИЙН БОГД СУМ**

Хурлыг санаачлан, ивээн тэтгэж, зохион байгуулагч:
Монгол Улсын Ардын Боловсролын Тэргүүний ажилтан,
Ахмад багш Иш-Осорын Чагнаадорж түүний гэр бүл, үр хүүхдүүд

2025.05.02 Баасан гараг

Өглөөний хуралдаан

08:00 Хурлын бүртгэл
08:30 Хурлын иээлт:

Монгол Улсын Хөдөлмөрийн баатар, Торийн хошой шагналт Нацагийн Жанцаниров
“Монгол аялзу”. Бодг сумын бүрэн дунд сургуулийн Морин хуурын дугуйлангийн сургачид.
Багш МУСТА, морин хуурч Мингоржийн Түмэнбаяр

Хурлыг иээж үг хэлж:
Баянхонгор аймгийн Богд сумын засаг дарга Лхагваагийн Ганаз
Ардын боловсролын тэргүүний ажилтан, ахмад багш Иш-Осорын Чагнаадорж

Хурлын дарга: Бямбаагийн Сэргээн ШУТИС-ийн Эрчим Хүчиний Их Сургууль. доктор, профессор
Хурлын нарийн бичгийн дарга: Цэрэнбатын Банзрагч Монгол Улсын зөвлөх инженер,
ШУТИС-ийн Геологи Уул Уурхайн Сургуулийн докторант

09:00 Соном-Ишийн Юндэнбат – СУИС, Монгол Улсын Соёлын гавьяат зүтгэлтэн, доктор (Ph.D)
“Ламын гэгээний шавийн түүх ба Их Богд уулын тахилгын уламжлал”

09:20 Д.Менх-Очир – Шинжлэх ухааны Гавьяат зүтгэлтэн, Түүхийн ухааны доктор, профессор
“Ардын засгийн үеийн Эрдэнэ бандид хутагтын шавийн хүн амын тоо бүртгэлтэс”

09:35 Х.Менхбаяр – ШУТИС-ийн Нийгэм Хүмүүнзүйгийн Сургууль. Түүхийн ухааны доктор (Ph.D)
“Богд сум юусган байгуулагдсан нь”

09:50 Д.Лувсандорж – МУБИС-ийн багш, магистр
“Эрдэнэ бандид хутагтын шавийн нутаг дэвсгэрийг нутгийн турсаар тодруулж нь”

10:05 Х.Бат-Эрдэнэ – Үндэсний Төв архивын Мэдээлэлтэй давлагчны төвийн ажилтан, магистр
“Баянхонгор аймгийн Богд сумын ардын аж ахуйтнууд /1940-1957/”

10:20 В.Эрдэнэчимэг – Баянхонгор аймгийн Архивын тасгийн дарга
“Баянхонгор аймгийн Богд сумын түүхэнд холбогдох архивын баримт материалы”

10:35 Имаоко Рёко – Япон улс. Осака Их Сургуулийн Хүмүүнлэгийн салбарын дэд профессор.
“Гөвь тосол ба Богд сумынхан 1989-1994 он”

11:00-11:30 Нийтийн зураг авалт. Цайны завсралага

- 11:30 Шийрэвдоржийн Насанбат. Тагнуулын Еронхий Газрын ахлах ажилтан,
 аюулгүй байдал судлалын доктор (Ph.D), дэд хурандаа
“Ламын гээзний шавиас хэмжээгээн зарим хүмүүс”
- 11:45 Юндэнбатын Бодбаатар ШУТИС-ийн Нийгэм Хүмүүнлэгийн Сургууль. Доктор (Ph.D), дэд проф.
“Богд сумын нутаг дахиархеологийн дурсгалууд”
- 12:00 Ч.Баяртайхан, Л.Тунгалааг, Д.Хонгор-ШУА, Одон орон геофизикийн хүрээлэн.
 Газар хөдлөл судлалын салбар
“1957 оны Говь-Алтайн Гурван Богдын газар хөдлөлт”
- 12:15 Чагнаадоржийн Сэмжид. Онцгой Байдлын Еронхий Газар. Ахмад, магистр
“Газар хөдлөлтийн аюулаас урьдчилан сэргийлэх нь”
- 12:25 Бямбаагийн Сэргэлэн – ШУТИС-ийн Эрчим Хүчиний Инженерийн Сургууль. доктор, профессор
“Богд сумд аялал жуулчлал хөгжүүлэхэд цахилгаан хангамжаар хангах боломжит шийдлүүд”
- 12:40-13:10 Хэлэлчүүлэг

13:10-14:00 Үдийн хоол /хотоос ирсэн төлөвлөгчид/

Үдээс хойших хуралдаан

Хурлын дарга: Юндэнбатын Бодбаатар ШУТИС-ийн Нийгэм Хүмүүнлэгийн Сургууль.

Доктор (Ph.D), дэд проф.

Хурлын нарийн бичгийн дарга: Чагнаадоржийн Сэмжид Онцгой Байдлын Еронхий Газар.

Ахмад, магистр

- 14:00 Н.Даваадорж - Хил Хамгаалах Еронхий Газрын Хилийн түүх судлалын секторын дарга.
 Хурандаа, доктор (Ph.D), дэд профессор
“Эх орны тусгаар тогтолцол, хилийн халдашгүй дархан байдлыг хангах үйл хэрэгт БНМАУ-ын баатар Норшигийн Жамбаагийн оруулсан хувь нэмэр”
- 14:15 Доржготовын Отгонбаатар – Монгол Улсаас БНСУ-д суугаа Элчин сайдын яамны 3 дугаар нарийн бичгийн дарга, докторант
“Богд сумын анхны схэээтэн ах дүү хөёрын тухайд”
- 14:30 О.Алтанзаяа - СУИС-ийн харьца Соёл, урлаг судлалын хүрээлэнгийн судалгааны баримтын сангийн эрхлэгч. Доктор (Ph.D)
“Их Богдын хүү эрдэмтэн Сономын Лувсанвандан”
- 14:45 А.Пэрээ-Ойдов - МУБИС. Доктор, профессор
“Шинжлэх ухааны Гавьяат зүтгэлтэн, Академич Жанцандоржийн Амгалангийн химийн шинжлэх ухаанд оруулсан хувь нэмэр, үнэт зүйл”
- 15:00 Г.Цэрэнханц доктор, профессор. Баармаа. Магистр. Ботаникийн цэнэрэлт хүрээлэнгийн ургамлын экофизиологийн салбар
“Шинжлэх ухааны доктор Цэрэндүламын Шийрэвдамбын ботаникийн ухаанд болон монголын байгаль хамгаалалд оруулсан хувь нэмэр”

15:00-15:30 Завсралага

- 15:30 Соном-Ишийн Юндэнбат. Соёлын гавьяат зүтгэлтэн. СУИС-ийн Соёлын сургууль.
 Доктор (Ph.D), дэд профессор
“Монгол Улсын Урлагийн гавьяат зүтгэлтэн, хөгжлийн зохиолч Чойгивийн Сангидорж”
- 15:45 Баасангийн Банзрагч. Монгол улсын зөвлөх геологич, магистр
“Монголын геологийн салбарт Жамбын Бямбаагийн оруулсан хувь нэмэр”
- 16:00 М.Эрдэнэ МУБИС-ийн ШУС-ийн доктор (Ph.D), дэд профессор, Ю.Бодбаатар, С.Бат-Эрдэнэ ШУТИС-ийн Нийгэм Хүмүүнлэгийн Сургуулийн багш. Доктор (Ph.D), дэд профессор
“Монголын антропологи, археологийн шинжлэх ухааны хөгжилд доктор, профессор Дашизвэгийн Түмэнгийн оруулсан хувь нэмэр”
- 16:15 Должижигийн Даан МУБИС, Газар зүйн тэнхим. Доктор, профессор
“Түдээгийн Баасангийн монголын газарзүйн шинжлэх ухаанд оруулсан хувь нэмэр”
- 16:30 Т.Дуламрагчаа – Боловсрол судлаач, МУБИС

プログラム続き

**“Сурган хүмүүжүүлэх ухаан - боловсрол судалалын шинжлэх ухааны салбарын иэрт эрдэмийн
Луухүүгийн Жамцын амьдрал, эрдмийн об”**

Дурсамж уутгалт

16:45 Баянхонгор аймгийн Богд сумын иргэдийн тус сумд 1989-1994 онд хэрэгжсэн “Говь тесол”-ийн судалгааны багийн гишүүн Японы Осака Их сургуулийн Хүмүүчилгийн салбарын доктор, дэд профессор Имадоко Рёкотой хийр дурсамж уутгалт

17.30 Уг хэлэл: Богд сумын Засаг дарга асан Одхүүгийн Дуламдорж
Ардын боловсролын тэргүүний ажилтан, ахмад багш Сангийн Цэвээнхүү

17:40 Оройн зоог /хотоос ирсэн төлөөлөгчид/

19:00 Тербатын Алтаншагайгийн МУСТА цолны мялаалга.
“Ерөол дүүрэн амьдрал” уран бүтээлийн тайлан тогтолт Богд сумын Соёлын ордонд

2025.05.03 Бямба гараг

Байгаль шинжлэлийн хурал: Богд сум анх байгуулагдсан Цутгалангийн адагт

Хурлын дарга: Д.Даш МУБИС-ийн Газарзүйн тэнхим. Доктор, профессор
Хурлын нарийн бичиг: Чагнаадоржийн Рэнцэнханд ШУТИС-ийн ГУУС-ийн докторант

10:00 Ц.Сэр-Од доктор (Ph.D), Д.Даш проф, Г.Уутанбат - МУБИС-ийн Газар зүйн тэнхим.
“Богд сумын ландшафт - газарзүйн онцлог”

10:20 Ц.Нямбаяр, Ц.Батсайхан, Б.Буунтох, Г.Бодбаатар – ШУА-ийн Одон орон, геофизикийн хүрээлэнгийн Газар хөдлөл судалалын салбар
“Их Богдын хагарлын геофизикийн иждэсэн судалгаа”

10:40 Э.Энхтайван, М.Одончимэг, Д.Энхжаргал, О.Баатархүү, Б.Ариунсанаа
АШҮҮС, Био-Анагаахын сургууль, Бичил амь судалал, халдвартын сэргийлэлт, хяналтын тэнхим
“Липосомд сууринуулсан антибиотикийн үр нэлэв”

11:00 Сандагдоржийн Сайханбаяр – Сандаан эзэн ХХК-ийн Гүйцэтгэх захирал
“Нутгийн онцлогт сууринсан аялал жууччлалын хөгжлийн боломж:
Бриндинг ба аялал жууччлал”

11:20 Иш-Осорын Нийцэвгомбо – Монгол Улсын Зөвлөх геологич, Баянхонгор аймгийн Геологи Гидрогоеологийн экспедицийн дарга асан
“Баянхонгор аймгийн Богд сумын геологийн тогтоц”

11:40 Ж.Цэвэнжав. Монгол Улсын гавьяат багш, ШУТИС-ийн Геологи, Уул уурхайн Сургууль.
Доктор, профессор.
Чагнаадоржийн Рэнцэнханд Худалдаа аж үйлдвэрийн танхимины эксперт, докторант.

“Баруун бүс нутаг дахь газрын тоосны салбарын ўл ажиллагаа”
12:00 Майнбаяр Б. Палеонтологийн хүрээлэнгийн Палеозоологийн салбарын эрхлэгч
“Баянхонгор аймгийн нутаг дахь эрт цагийн амьтан ургамлын судалгааны тойм”

Хурлын хаалт:

- Соёлын төвийн эрхлэгч Г.Тунглагал
- Дашизвээгийн Түмэн Шинжлэх ухааны доктор, профессор
- Хурлыг хааж Богд сумын Иргэдийн Төлөөлөгчийн Хурлын дарга Б.Анхбаяр

Челоөт аялал, Орог нуурын зах, Элсэн гээг, зураг авалт
Давхрын талд морины уралдаан үзэх, малчны хотонд зочлох

17:00 Сумын төвд ирж амарна.

2025.05.04-ийн өглөө 07:00 цагт Улаанбаатар хот руу хөдөлж.

(2) 2025年8月のツェルゲル訪問(8月13日から30日まで)

(2.1) 東ボグド山ツェルゲルへ

初めてモンゴルを訪れた1989年から共同調査に出かける時は、バスやジープなどに乗り、交通手段の心配をすることがなかった。その後、筆者が個人で長く調査を続けることができたのは、夫が車の整備士で、道を覚え、安全に運転してくれたことが大きい。コロナ禍が終わって、なかなかツェルゲルに行けなかったのは、夫が日本で務めるようになり、車と運転手がいなかったからだ。ゴビ山岳地帯は岩が切り立っていて、タイヤの消耗が激しい。知人に車を出してくれと容易に頼めるような道路状況ではない。

しかし、5月にはウランバートルからボグド郡まで、学術会議の事務局がチャーターしたバスに乗り、ボグド郡までは10時間辛抱すれば行けることがわかった。また、ボグド郡の中心地に就けば、簡易宿泊所もあるが、泊めてくれる東ボグド山の知人宅がたくさんあることもわかった。郡の中心地まで来れば、タイミングさえ合えば、東ボグド山まで連れて行ってくれる知人がいる。なんとか夏には、バスでボグド郡まで来て、東ボグド山を目指したい。もし、行けなくても、郡の中心地の知人を訪ねることができると思った。

また、今回は、文学部の2年生と2人旅であった。筆者が担当する共通教育科目の科目で、映画「四季 遊牧」を見て、実際に東ボグド山ツェルゲルを見てみたいと思い、特別外国語モンゴル語の授業を受け、準備してきた学生である。そのため、できるだけ、映画の登場人物に会えるよう、ルートを考えた。

5月の訪問時には、ウランバートルからボグド郡まではバスが週に1回は走っているからなると聞くが、その言葉を信じ、実際には、その通りになった。なんとかなるということの背景には、要所で、キーパーソンが助けてくれる、そういうネットワークがあるということである。それは検索には引っかからない。次の節からは、単なるルートや日程ではなく、お世話になった方、再会できた方、出会った方を記録しておきたいと思う。今回の訪問は、調査というよりも、5年ぶりに訪ねた筆者を受け入れてくれるかどうか、再会そのものが目的であった。

(2.2) ウランバートルからボグド郡まで

5月の学会のメンバーに、ボグド郡中心地の人々が参加しているfacebookのグループ *Богд сум Хориулт* に入れてもらって情報を集めたが、7月のナーダム、8月のホースマンフェスティバル⁴⁾が終わってからは公共バスの情報が途切れてしまった。困っていると、元ボグド郡長のO. ドラムドルジから、自分はボグド郡にいて、息子ムンフバトが迎えに来るので、その車に乗って一緒に来てはどうかとメッセージをくださったので、お言葉に甘えることにした。

筆者らは、ウランバートル市内の渋滞を避けるため、ボヤントオハー空港のそばに住む卒業生のアパートに泊めてもらっていた。そのあたりはノミニン・デパートが3つも、4つもあるほど、人口が集中し、9月1日の朝の通勤時間帯には、空港のゲート前まで渋滞の車の列が続いていた。8月末はモンゴル全土からウランバートルへ学生や学童が集まって来る。ボグド郡からウランバートルに帰るチケットを早く押さえておく必要があるので、 <https://eticket.transdep.mn/> オンラインのサイトで

4) モンゴル国労働英雄D.ゴンボジャブ記念ホースマンの祭りの第3回 "Адуучин - 2025" が8月7日に県中心地から北西にあるドールサフ谷で行われた。

調べてみたところ、ボグド郡とウランバートルのルートでは公共バスの情報がなく、バヤンホンゴル県からウランバートル行きのチケットを予約した。支払いは携帯電話を通じた決済になっているが、モンゴルの銀行の預金通帳を持っていないので、宿主に現金を渡して振り込んでもらった。ウランバートルではどんな支払いも電子マネー決済が主流になっているが、田舎で過ごすにはまだ現金が必要な時がある。

16日8時、ムンフバトの車で、ボヤントオハーからボグド郡に向かった。彼はボグド郡で生まれ育ち、遊牧民になろうとした少年期に筆者が写真を撮っていて、夏になると郡長の父を訪ねてくる人と覚えてくれていた。国立芸術大学に進学し、国営テレビ局のカメラマンとなり、今は独立しているが政府関連の撮影や独自の映像作りに取り組んでいる。ボグド郡へのルートを間違うことはないし、ゴビプロジェクトのフィルム写真の扱い方にアドバイスをもらうなど、頼ってもないドライバーだった。

ボグド郡の中心地からツェルゲルには、東ボグド山の優秀遊牧民の故サムダンホルローの娘、シェレーに messenger で迎えに来て欲しいと連絡していたが、wifi が届かないところで夏営しているようで、既読のサインがなかった。筆者は自分の居場所を facebook にアップロードして、誰かの目に留まることを期待した。その頃、シェレーの息子で、東京に勤めているタムジッドが、故郷の東ボグド山ツェルゲルに帰郷していて、ちょうど東ボグド山からボグド郡、そしてウランバートルへ自家用車で帰る途中であった。facebook の筆者の投稿を見て、親に電話し、話を繋げてくれた。ボグド郡に到着した日は、郡中心地のドラムドルジ、ヨンドンダシの家で夕食をいただき、娘のボルマーの家に泊めていただいた。

翌日、8月17日の午後、シェレーとシャグダルが、東ボグド山を下りて、車で迎えに来てくれた。郡中心地の2人の家の中は、5月に訪れた時よりさらに美しくなっていた。まるで、ウランバートルの高級マンションのような内装だった。この夏は、100周年記念に向けて改装し、来客も多くなり、東ボグド山での家畜の仕事は一番下の息子のトゥグルドウルに任せ、搾乳は春に仔山羊を産まなかつた母山羊5頭の搾乳に留めていた。出産しなかつた母畜を別の仔畜をなつかせて搾乳することを хайдагшуулах ハイダクショーラフと言う。その母山羊が来年仔畜を産んだ時、搾乳できるようにする。一方、出産した方の母畜は、仔畜が乳を吸うので、乳は枯れず、仔畜は早く大きくなる。そうすると、カシミヤもたくさん取れる、とシャグダルが説明してくれた。そこでボグド郡設立100周年記念の "ИХ БОГДЧУУДЫН ТҮҮХ" を見せてもらい、それを持って、東ボグド山に向かい、一通り読むことができた。ロギオ(故トーフガイの妻)が後に「東ボグド山ツェルゲルの歴史の本を出したい」と語ったのは、この『イフボグドの人々の歴史』と言う本を読んだからであろう。この本については、また後に書くこととする。

(2.3) 東ボグド山ツェルゲルで再会した人々

東ボグド山ツェルゲルは東西が40km、南北が20kmと広い。17日の夜に到着したのは、ツェルゲルの東部のバガナリーン谷上で、郡の中心地から100kmのシェレーとシャグダルの夏営地であった。標高は2700mぐらいあったと思う。そこから南に向かうとバヤンリグ郡のハタンソーダル山が見える。その夏営地には、末息子トゥグルドウルのオトルのゲルが立てられていて、23日まで滞在した。そこからシャグダルの運転で山上の夏営地と山麓の秋営地の遊牧民知人宅と一緒に訪問した。トゥグルドウルはもう24歳、一人前の遊牧民になっていて、来年には結婚しそうだ。革で頭絡や足枷を作っ

たり、古い鞍を修理したり、郡を代表する革製品の工芸家になっていた。

8月19日、故サンギダグワの娘バイガリの家に行くと、母ナツアグ（サンギダグワの妻）がバヤンホンゴル県からやってきていた。70歳を越えても、自分の足で歩き、記憶もしっかりしていて、筆者を覚えてくれていた。故サンダンホルローの長男ガナと妻のボイナー、末弟バトバータルと妻のドルジドラムの住む東ボグド山頂の夏営地ウルグート谷上に行った。各家のヤクが山頂に集まり、ヤクの王国になっていた。バトバータルは県の優秀遊牧民として表彰されたと言う。8月20日にツェルゲルで最も東、ウブルハンガイ県ボグド郡との境を接するダイルガ谷の故サンギダグワの娘ドラムとオチルプレブの家、オチルプレブさんの母シャーズガイ（故トゥムルバートルの妻）の家を訪ねた。ドラムの一人息子エルヘムは、ウブルハンガイ県の中心地アルバイヘルに両親と住み、学校に通っている。この秋から8年生になるので、親戚に預けて、夫婦は家畜を飼うために、東ボグド山に帰つて来るつもりだという。8月21日にガショーン谷口のダンバ（バヤンホンゴル県中心地在住）の長男サンバガが娘と夏営し、チョロート谷口にはダンバの次男ガナが夏営していたが不在、どちらも放牧に出ていた。イフナリーン谷口にはドルジホルローとナラー（故トーフガイの妹）、息子のアルタンホヤグが夏営していた。東ボグド山の南麓の砂漠性草原地帯にある秋営地アムナオスに故ドージャルガルの妻のツエグメド（故トーフガイの妹）と息子と娘が秋営していて、チャチルトには故スレンホルロー（故サンダンホルローの妻の兄弟）の息子ツエンゲルと妻ムンフゲレルが秋営し、ハルハウツガイトには故ドージャルガルの息子チャンガイが放牧に出かけて不在、ザラーに秋営しているコクバータルさんは不在、故シャーズガイの息子セルオドも不在であった。9月1日の年度初め、新学期に向けて、郡や県の中心地移動が多い時期、また家畜にしっかり体力をつける放牧に忙しい時期であった。筆者は、シュレーとシャグダルの冬営地のイヘルで東ボグド山最後の夜を過ごした。

こうして書いてみると、亡くなった方が多いことに気づく。

（2.4）ボグド郡の中心地で再会した人々

翌日、22日シュレーとシャグダルの車でボグド郡の中心地に行き、シュレーが営業する洋服屋さんを見学し、トウイン川に足と手と髪の毛を洗いに行った。そのあと、ロギオと故トーフガイの娘で、女性で初めて、第4バグの長となったウルジーヒシグの家を訪ねた。すでにfacebookのグループで情報を集めて、ボグド郡の中心地からバヤンホンゴル県の中心地に行く車と連絡を取ってくれていた。またそこで例の100周年記念の本『イフボグドの人々の歴史』をいただいた。ロギオはバヤンリグ郡の牧民と結婚し、ハタンソーダルの近くに夏営する娘のナラントヤーの家に滞在していて、messengerで対面し、おしゃべりを楽しんだ。その日は、シュレーとシャグダルの家で泊めてもらった。翌日の運転手が出発時間を告げに、シュレーの家にやってきた。すると、郡の中心地でシュレーとシャグダルが住むアパートで隣同士だったことが会ってわかり、「トゥムルさんなら安心よ」とシュレーが太鼓判を押してくれた。また、バヤンホンゴル県ではバトツエンゲルとバドローシの家に泊まることになっていたので、県の到着場所にバドローシが迎えに来てくれたが、トゥムルとも知人であった。

（2.5）バヤンホンゴル県で再会した人々

23日、県の中心地に到着したが、バトツエンゲルは、次男サンギの車で、ウランバートルに行き、弟のフレルトゴーを見舞っているということだった。それで1991年から但東町（現在豊岡市）に研修

生として来日したボルドスフとfacebookで連絡を取り合って、再会した。二人の子どもに、孫がいる。県の中心地を案内してもらい、トウイン川の上流で足を洗った。お互いに年をとったことを確認しあつた。但東町の山下や本田の娘さんにmessengerで繋ぎ、対面で挨拶をした。

バツエンゲルはタクシーの運転手、バドローシは枝肉を仕入れ、骨から外し、レストランの求めに合わせて、炒め用に薄切りにしたり、ボーズやホーショール用に細かく刻んだりして、お店に届けて生計を立てている。二人を訪ねて客の多い家で、この日もバドローシを訪ねてくる人は多かった。故ジグメッドドルジの養女オルトナサンはツェルゲルの分校の教員で、その娘で、ドイツ留学中の学生オユンと夫が、ドイツに戻る前にと、挨拶に来ていた。ミヤグマルスレンとナンジッドの息子テムジンとテルビシと三家族の孫、合わせて14人が私に会いに来てくれた。ミヤグマルスレンは、バツエンゲルの後にヘセグ長になった人で、夫婦とも獣医であった。県の中心地に近いウルジート郡に移住し、家畜を盗まれたり、騙されたり、いろんなことがあったが、今はナンジッドがバリアチという触診で病状を診断する仕事で成功し、有名になっている。その夜、8時過ぎ、ウランバートルからバツエンゲルと三男のサンギ夫婦と子どもが帰ってきて、夕食と一緒に楽しんだ。その後、messengerを使って、バツエンゲルが但東町でホームステイした奥田清喜と対面した。「小貫先生ともこうして対面して話したい」と述べていた。

25日、ウランバートル行きの長距離バス停までバツエンゲルとバドローシに送ってもらい、8時にバスに乗った。道中2回の休憩、21時過ぎのウランバートルのドラゴン長距離バスセンターに到着し、バツエンゲルの次女ハンドの夫に迎えに来てもらい、一泊泊めていただいた。

東ボグド山からボグド郡中心地は100km、ボグド郡中心地から県中心地は130km、そこからウランバートルまで700km、人と人のつながりに助けられて、2週間の旅を実現することができた。

(2.6) 1995年の伝説の人々

1995年のボグド郡設立70周年記念の年、筆者はゴビプロジェクトの事務局員のバヤラーに付き添われて、ツェルゲルに行ったことがある。ウランバートルからバヤンホンゴル県都まで国内線の飛行機で、バヤンホンゴル県からボグド郡までトラックで、ツェルゲルに到着した。特に、ボグド郡—ツェルゲル間の道中は、ゴビプロジェクトの運転手が日産パトロールを運転すると、70kmの道のりが45分で到着できる距離と時間の感覚であった。

しかし、70周年記念ナーダムが終わった翌日、筆者は、ツェルゲルに帰るシーレブのトラックの荷台に乗せてもらって東ボグド山に向かった。ここから「70周年の伝説」が始まる。トラックの荷台には、シーレブ家、そこにはミヤグマルスレン家、フレルトゴー家、サンギダグワ家、バトジャルガル家が家族ぐるみで乗り、男性たちはほどよく酔っ払っていた。月の美しい夜だったが、道中、知り合いの家があれば、そこで降り、挨拶し、出された酒を飲み、ケンカが始まる、ということを繰り返した。ボグド郡の中心地を18時に出発したトラックが、東ボグド山のツアガーン・シュージに夏営するバツエンゲル家についたのは、3時であった。一行は、皆、ゾンビみたいな体の動きで、トラックを降り、バツエンゲル家のゲルの中に入って行った。その時、バツエンゲルは、筆者をゲルの中に入れず、「今からいろんなものを見るから、今日はトラックの運転席で寝なさい、」と言った。筆者は、恐怖と好奇心を抱えながら、助手席で横になり、深い眠りについた。翌朝、乳製品を作る小さなゲルの煙突から煙が上がっているのを見て、バツエンゲル家が起きていることがわかった。みんなが入っ

ていった母屋のゲルのドアを恐る恐る開けてみたら、ゾンビだった人たちが円になって座り、乳茶をすすっていた。髪は血の塊で赤黒くなっていたり、白いTシャツの肩や胸には赤い墨が付いていたり、それでもおとなしく座って、乳茶をすすっていた。筆者は1ヶ月、単独でツェルゲルに滞在する予定で來たので、その初日に、こんな凄惨な朝を迎えるとは思わず、愕然とした。しかし、主人の席に座るバツエンゲルがよく眠れたか？と笑顔で大丈夫だよ、と安心させ、小さい方のゲルでお茶を飲みなさいと促してくれた。そのゲルには、バドローシと子どもたちがいた。避難して過ごしたのだろう。バドローシは、座って、お茶を飲みなさい、と安心させるように笑ってくれた。

ボグド郡100周年記念の年に、この「70周年の伝説」の話をして、どの家でも大笑いになった。この話の中に出でてくる遊牧民の中で、シーレブが亡くなった後、次の世代はバヤンホンゴル県やウランバートルに移住し、ミヤグマルスレン家は、県の北部、ウルジート郡に移住し、フレルトゴー家は東ボグド山の北側平原に移住し、バトジャルガル家は、妻のトゴーチが亡くなった後、夫のバトジャルガルは県の中心地に移住し、子どもたち世代が郡や県に住んでいる。遊牧民として東ボグド山で遊牧を続けているのは、サンギダグワが亡くなった後、娘のバイガリとドーガの2家族である。70周年の伝説を通じ、30年の年月が過ぎ、ずいぶん変わったことをシェアすることになった。そのことがかえって、今、記録しておかないと、忘れてしまうことがたくさんある、という気持ちも共有することになった。

こうして分かったことは、2025年現在、東ボグド山ツェルゲルには、50戸足らずの遊牧民が住んでいること。筆者の知る最も多い戸数は、コロナ禍前の110戸であった。ただし、1980年代にバツエンゲルがヘセグ長として赴任した年は、東ボグド山には26家族しか住んでいなかった。また、ツェルゲルに残っている遊牧民は、親の世代がネグデル時代から優秀遊牧民だったダンバ家、サンダンホルロ一家、サンギダグワ家で、子の世代だけでなく、孫の世代も積極的に牧畜経営を発展させている。心技体のどれも優秀な遊牧民が頑張っている。

ただ、牧民戸数の多い年は、一つの谷の入り口に3戸の家族がホタイルを組んでいて、家族の間で分業したり、子どもたちはホタイルの中で役割を果たしていたり、補い合って暮らしていた。それが、1戸で暮らすとなると、できることはするが、できないことは無理してやらない、ということになる。例えば、母親一人で搾乳できる山羊の数は100頭が上限となり、郡の中心地の学校で学ぶ子どもがいると、母親も早々に搾乳を切り上げて、中心地に移らないといけないため、ミルクは仔山羊の飲み物となる。しかし、その方が、仔山羊が早く大きくなり、体表面積が大きくなり、カシミヤがたくさん取れるという考え方も生まれる。乳酒を蒸留する家も少なくなり、その分、アーロールの甘みやコクが増し、高く売れていいという考え方も生まれていた。この夏、山羊のアーロールは、ボグド郡で1kgあたり60,000トゥグルグの高値がついたと言う。1980年代後半から農牧業ネグデルの生産組織へセグ、ソーリによる分業ではなく、伝統的なホタイル共同体を復活させ、五畜を飼い、家畜の恵を余すことなく生活の恵みとして利用したいという流れがあったが、就学児童のいる世代で母親は中心地に、父親は遊牧地に分かれて暮らし、子どもが大学に進学し、留学し、就職し、親としての役割を終えた親世代の内、家畜を飼う能力の高い人々が東ボグド山に残っている。遊牧民として残った子どもも、20代になっている。

シェレーは、首都にも、県都にも、自分たちには仕事がない。翌日から何を食べて暮らすか、そのストレスに潰されそうになるぐらいなら、家畜を飼って暮らした方が絶対にいいと考えている。働き

さえすれば、遊牧地にはなんでもある。冬营地を3つ持っている。一方、年を取り、膝が痛み、体に自信が持てなくなった時のために、郡中心地で暮らす方法も手探しし、アパートや土地を3ヶ所持っている。末っ子が来年結婚することを契機に、新しい人生が始まりそうだ。

図6 『イフボグド山の人々』



(2.7) ボグド郡設立 100 周年記念『イフボグド山の人々』について

この『イフ・ボグド山の人々』という本は、2025年のボグド郡設立100周年記念ナーダム前に発行された。元郡長のO. ドラムドルジと Sh. ダグワが監修し、新しいところは若い人たちが執筆したものである。

すでに1995年にO. ドラムドルジが監修した”Баянхонгор аймгийн Богд сумын түүхэн замнал（バヤンホンゴル県ボグド郡の歴史の足跡）”、2005年にS. セデド、Sh. ダグワ、G. ハヴチョールらが監修した”Баянхонгор аймгийн Богд сум（バヤンホンゴル県ボグド郡）”という本があり、それを元に、最新の歴史の研究の成果、新しい経済活動、そして、個人の回想を加えたため、389ページに及ぶ。

内容は、次の目次が示すように、ボグド郡の自然条件、歴史、築いてきた社会システム、ボグド郡出身の功労者を紹介している。

『イフボグド山の人々』の目次（翻訳）

序章 私たちを育んだ大地
故郷の大地
山々（イフボグド山、ジャランボグド山、バガボグド山など）
トウイン川の3つの支流の流域
谷や盆地（モンゴリン・ホーロイ ザグの砂丘など）
平野
砂丘

(目次つづき)

河川
湖
地質学調査の歴史
地殻変動の歴史
地下資源
気候、四季の特徴
土壤
在来植物
野生動物
歴史的な文化遺産
伝説と歴史
石碑やオボー
第二章 ボグドの人々の史跡
略年表
人々の歴史、系統
略史
モンゴル帝国時代
ラミン・ゲゲーン旗の時代
人民政府の時代
社会主義時代の行政
民主化以降の行政
ボグド郡議会
ボグド郡行政、郡長
5つのバグ
党、国家組織
若者の組織
労働組合
女性組織
高齢者の委員会
牧畜
家畜数
牧民
国家的功勞牧民
県優秀牧民
郡優秀遊牧民
自営遊牧民の歴史
教育、文化、健康、スポーツ組織
医療
教育
義務教育学校
幼稚園
保育園と幼稚園
文化センター
文化芸術の名人
体育、スポーツ

(目次づき)

モンゴル相撲の力士
高名な競走馬の調教師
国立社会サービス部門
獣医院
郵便と通信
気象観測所
エネルギーセンター
天体観測所
商業、工業、社会的サービスを行う私企業
ボグド郡商工組織
ハーン銀行
国立銀行
ドゥルブン・ボグディン・ボヤン ホルショー（貸付業）
オログ・ノーリン・ヒシグ ホルショー（カシミヤ原毛販売）
テルグーン・ボグド・ハイルハン社（乳製品加工）
国際交流・国際共同
第3章 イフボグドの誇るべき人々
イフボグドの著名人
国家的英雄、軍人
国家的労働英雄
国家的文化功労者
国家的名誉ある受勲者
国家に貢献した政治家
国家ナーダムの名誉ある力士
国、県の優秀遊牧民
学者、研究者
國家の助言者
軍人、警察等で貢献した人々
国家公務員の貢献者
芸術、文化、スポーツの著名人
仏教者たち
現代の先端を行く専門家たち
国家勲章受賞者
労働英雄受賞者
第4章 回想
ウランバートル市のボグド郡出身者の会
ボグド郡のラクダ飼い
東フルメンの馬飼い
ジャランボグド山とドラーンボグド山の山羊飼い
ヤク乳加工グループの人々
ボグド郡のバレーボールチーム
地震災害
ボグド郡をリードした先人たちの回想
ボグド郡の歌や詩
文献

ボグド郡の概要だけでなく、それぞれのテーマの関係者から回想を集め、掲載し、その時代に社会を支えた人の声が聞こえてくるよう構成されている。また、自然科学者がボグド郡で行った研究調査

の成果、ボグド郡が持っている資料、最初に紹介した『ハルハ・サイン・ノヨン・ハン部エルデネ・バンディド旗ラミン・ゲゲーン・シャビとバヤンホンゴル県ボグド郡』学術会議の報告書とも重なるところがあり、近年の社会科学の成果も取り入れている。このように網羅的に、まとめ上げるには大変な苦労が想像できる。回想の書き手の選定も難しかったと思われる。

また、バトツェンゲルがホルショーを設立した功績を紹介するところがあり、東ボグド山ツェルゲルにホルショーが支える分校を設立した時のオルトナサン先生の回想があり、国際交流のところには但東町の本田重美とボグド郡長が握手をする写真があり、ゴビプロジェクトがボグド郡100年の歴史に刻まれてうれしく思った。

この本をもう少し簡略にし、モンゴル語2年生の購読の教科書を作れば、モンゴルの地方の地域史を理解する基礎となるだろう。

しかし、東ボグド山ツェルゲルの人々は、物足りないようであった。その理由を推察するに、第一に、ボグド郡には、4つのボグド山があり、ボグド郡で最も標高が高く、中央に座すのは確かにイフ・ボグド山である。その次に高い東ボグド山は、地図上では、バガ(小さい)・ボグドという名前であるが、地元の人は、大小で区別して呼ばず、イフ(大きい)・ボグドを西山、東ボグド山を東山と呼んでいる。東ボグド山の西半分はボグド郡に、東半分はウブルハンガイ県のボグド郡に含まれる。郡の中心地からモンゴリン・ホーロイという砂地のザグの茂みが砂峠となり、物理的な障害となっている。その向こうに頂上から半分の姿が見える東ボグド山は、中心地にお尻を向け、東を向いているように見える。実際に、東ボグド山に暮らす人は、南のバヤンリグ郡、北のウブルハンガイ県のボグド郡、バローン・バヤン・オラーン郡の方が近く、バヤンホンゴル県の中心地より、ウブルハンガイ県の中心地アルバイヘルに近い。ボグド郡に所属しているが、郡の中心地に頼らず、自立した風土がある。同じボグド郡に住んでいても、西ボグド山より、東ボグド山にアイデンティティーがあるので。

第二に、ボグド郡は6つのバグに分かれるため、東ボグド山ツェルゲルについての記述は、6分の1になる。「この本のためにカンパしたけれども、自分の親のことが載っていない。」「載っていても、名前だけである。」「郡で表彰された自分の子どもが載っていない」というような不満を聞いた。しかし、

写真4 ボグド郡の中心地から見た東ボグド山の姿



筆者撮影

図7 バローン・バヤン・オラーン郡から見た東ボグド山の姿



出所 <https://www.facebook.com/photo?fbid=571492614983402&set=a.571492648316732>

それはボグド郡として編集される限りは仕方のないことだということは理解していて、むしろ、東ボグド山に生きた人々の歴史を別の本としてまとめたい、という気持ちが高くなっていた。

ボグド郡100周年記念の本が出たことで、もっと自分たちの東ボグド山に根づいた歴史を記録しておきたいと思うようになったのである。

(2.8) チャグナードルジとドラムの娘センジッドによる **Ургын бичгийн ном** 家系の2冊の本の出版

5月のボグド郡での学術会議の事務局を担当したチャグナードルジの娘センジットは、2022年に父チャグナードルジの父母の2つの家系について書いた”Бидний өвөг дээдэс ГАНЖУУРЫНХАН, НАНЖИМЫНХАН”

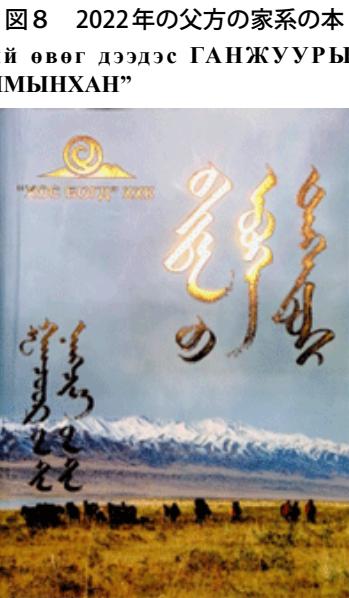


図8 2022年の父方の家系の本

”Бидний өвөг дээдэс ГАНЖУУРЫНХАН,
НАНЖИМЫНХАН”

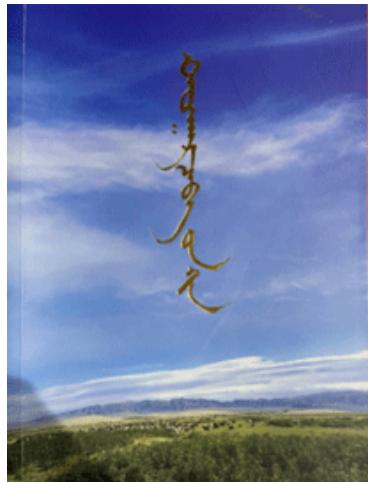


図9 2023年に出版された母方の家系の本

”ДУГАРЖАВЫНХАН”

НАНЖИМЫНХАН”、2023年に母ドラムの家系について書いた ”ДУГАРЖАВЫНХАН” という本を出版した。

2022年の父方の家系の本 ”Бидний өвөг дээдэс ГАНЖУУРЫНХАН, НАНЖИМЫНХАН” は、2018年にチャグナードルジさんが書き始めた内容を。前書きによると「1870年から2022年(150年)にかけて生きた9世代、チャグナードルジの父方のガンジョール一族には1580人、母方のナンジム一族には4680人、合わせて6260人の名前⁵⁾が登場する。492ページに及ぶチャグナードルジ一族の「歴史」と言えるだろう。

チャグナードルジの祖先となる母方のナンジム一族を見てみよう。この本に書かれた第一世代をナンジムとすると、ナンジムにはドルジヴァーンダンを含む5人の第二世代がいて、ドルジヴァーンダンには、ツエデンを含む5人の第三世代がいて、ツエデンには1893年に生まれたトゴーを含む8人の第四世代がいて、トゴーには1922年に生まれた娘イバを含む4人の子ども第五世代がいて、イバはイシ・オソルと結婚し、1944年生まれの(この本を発行したセムジドの父)チャグナードルジ、1951年生まれの娘ヨンドンダシを含む5人の子供を含む第六世代がいて、チャグナードルジには、セムジドを含む6人の子どもを含む第七世代が5月のボグド郡の学術会議を組織し、チャグナードルジの孫の第八世代が会議をサポートし、さらにひ孫の第九世代が生まれている。

ガーンジョールの一族からチャグナードルジの父方を見てみると、ガーンジョールにはハルザンやヴァーンチグら5人の第二世代がいて、ヴァーンチクには息子ゴンチグを含む3人の子の第三世代がいて、ゴンチグにはイシ・オソルや僧になったレンドーを含む4人の子どもの第四世代がいて、イシ・オソルはナンジム一族のイバと結婚し、チャグナードルジやヨンドンダシらが生まれる。ヨンドンダシの夫が長年郡長を務め、分校設立に協力してくれたO. ドラムドルジである。

ガーンジョールの第二世代のハルザンにはツェレンドラムら4人の第三世代がいて、ツェレンドラムには、ドルジンヒトゴーという2人の第四世代がいて、ドルジンにはサンギツェヴェグを含む5人の第五世代がいて、第四世代のトゴーとヤンジンには、第五世代のトーフガイ(妻がロギオ、末娘がウルジーヒシグ)、トゴーとジャンバルの子がソソル、ビヤンバスレン、ナランゲル、ツェヴェグミド、ゲルで、従兄弟同士であることがわかる。チャグナードルジ家とサンギツェヴェグ家、トーフガイ家、ジャンバル家の娘たちは、ガーンジョールが共通の祖先となることがわかる。

2023年に出版された母方の家系の本 ”ДУГАРЖАВЫНХАН” に登場する人名の数は書かれていないが、312ページの本となっている。

ドガルジャブにはオチルを含む5人の子どもの第一世代がいて、オチルにはビヤンバを含む10人の第二世代、ビヤンバにはドラムを含む8人の第三世代がいる。ドラムは、チャグナードルジと結婚し、6人の子どもを含む第四世代、ドラムの孫の第五世代、ひ孫の第六世代が生まれている。

ドガルジャブの第一世代のダンバ、その子の第二世代ナンギドマー、その娘のビヤンバハンドがB. トゥングと結婚し、ビヤンバを含めた11人の子どもの第4世代がいる。T. ビヤンバーは、ボグド郡の校長を務め、分校設立にも協力してくれた人である。その妻、バザルは、ナンジムの子ドルジヴァーンダン、その子ツエデン、その子トゴーの養女サンギツェレンの娘になる。イバとサンギツェレンは兄弟となり、チャグナードルジとバザルは従兄弟となる。

ゴビプロジェクトの社会班は、東ボグド山ツェルゲルの人々の横の繋がりがわかる家系図を作った

5) P.10

ことがある。この2冊の本は、家族だからこそ、書き残すことのできる家系図の本で、一般に販売される本ではない。そこには、写真がふんだんに使われていて、これから先の子孫に残すものである。2つの一族の秘史と言えるものである。

また、家族に僧侶がいる家庭から、高等教育を受ける子孫が生まれ、大学を出て、教員や郡長や校長になる人材が生まれていることがわかる。自分たちは、ラミーン・ゲゲーンの弟子たちであること、彼らが東ボグド山ツェルゲルの遊牧民がホルショーや分校を設立しようとした時、積極的に支援した人たちであることがつながって見え、非常に興味深かった。

この2025年のボグド郡訪問で知ったことは、2022年からチャグナードルジの娘センジドが家系の本を出版し、2025年に5月にボグド郡で百周年記念の学術会議を開き、7月にボグド郡から百周年記念の本が出版され、今、東ボグド山ツェルゲルの人々は自分たちの歴史を本にしたいと考えている。地域の人々から地域研究の基礎となる本が生み出そうとされている。O. ドラムドルジが述べたように、新しい段階に入ったと言えるだろう。

（3）『東ボグド山の家族の秘史』の本、家族版と出版用

筆者は『モンゴル研究』に東ボグド山ツェルゲルにおける調査報告を書いてきたが、その後、投稿しなくなつた。それは、あまりにも家族間の個人情報を知り過ぎてしまったこと、名前を仮名にしたとしても、ツェルゲル以外の地域で定点観測をしていないため、誰のことを書いているか、翻訳して読めばわかるようになった。翻訳も機械で容易にできるようになり、『モンゴル研究』はインターネット上で公開されるため、子や孫の若い世代が読めるようになった。このため、見聞したことを書くことが難しくなつた。

しかし、今年の訪問で出会った人々は今書き残す必要があると考えていて、彼らとともに、各家族に残す本と一般に出版する本を分けると、本にすることができるという感触を得た。

ボグド郡が出版した百周年の本は、ボグド郡という社会がどうできてきたか、というところに力点がある。例えば、ゾドのような自然災害でどうなったか、それをどう乗り越えてきたか、断念したか。市場経済の波がどのように家畜経営に影響を与えてきたか。家畜をたくさん飼えば、功労者として表彰され、記録に残る。しかし、特に、規模拡大に興味を示さず、誰よりも豊な暮らしをしようと思わず、飄々と生きてきた人もいるし、酒に溺れた父を見て、しっかりした子どもたちが育つ家もあるし、断酒に成功し、50頭程度の少ない家畜を飼いながら人生を満足している人もいる。山岳砂漠の厳しい自然条件で、ネグデル解体後は牧畜業を保護するネットがない状態で、そこで生き続けることは、功勞に値する。また、東ボグド山の故郷を離れ、県や首都や外国で暮らすようになった人々の心の中にも、この自然と社会がある。あの山岳砂漠の自然に根付いた、それぞれの歴史をまとめることは、筆者の義務であると考えた。

ゴビプロジェクトの調査においても、その家の戸主のライフヒストリーは、30年遡っても营地の名前をはっきり覚えていて、そこで何があったか、どう暮らしたか、思い出を話してもらえた経験がある。遊牧民の歴史の記憶のフォーマットは、四季の营地とともにある。そのような营地利用、家族、災害、家畜数、家財道具などを聞き取っていくことがまず急がれる。

また、この報告で「故」と言う文字をたくさんつけたように、本人にはもう聞き取ることができず、次の世代、子どもたちから見た親の世代を語ってもらう必要がある。郡や県、首都に移住した子ども

達からも聞き取ることができるだろうし、facebookを通じて、原稿を送ってくれることもできるだろう。

モンゴル国立大学にオーラルヒストリーラボができることになり、来年の春、オープンする。昨年の冬、デルゲルジヤルガル教授が来日した時に、ゴビプロジェクトが収録したカセットテープをお渡しした。それをデジタル化し、社会科学研究者で聞いたところ、現在とは違う話し方で、地方の首長や遊牧民が話していることで、貴重な資料だと評価を得た。例えば、ボグド郡の説明は、最初の郡長のO. ドラムドルジが話しているので、それは過去のものではなく、今、ウランバートルに暮らしている本人と共に聞くことで、当時のことを共有し、共に研究することができるだろう。まさに、今、この数年は、それが可能だと思われる。

また、ゴビプロジェクトが保管している写真があり、2001年以降はデジタル化したが、1989年から2000年までは、フィルムで保存している。それをデジタル化し、共有する必要がある。遊牧民の家庭には、現像して、プリントして、お土産として差し上げたが、今は、誰もがスマートフォンを持っているので、デジタルで欲しいという要望が強い。

これらのことを見て、各家族の秘史と印刷用の本の2種類を作るため、来年から取り組みたいと思う。

(いまおか りょうこ)

《創刊 50 周年に寄せて》

モンゴル文学100年と日本におけるモンゴル文学研究50年 その道程、現在地、そして危機と新たな道

芝山 豊

はじめに

2025年の夏、モンゴル研究会『モンゴル研究』誌の編集長から、「創刊から50年目にあたる今年、創刊号編集メンバーとして、文学関係の研究分野から50年を振り返って何か自由に書いてほしい」との依頼が届いた。

『モンゴル研究』創刊号は、1974年から1975年にかけて準備され、1975年2月10日付けで発行された。当時、創刊を決議し、編集にあたったのは、全員、大阪外国语大学モンゴル語科のモンゴル研究会の学生会員であった。出版資金捻出のために、早朝、皆で道路沿いの交通量調査のアルバイトをしたり、遅筆の執筆者に毎日のように催促をかけて「鬼」呼ばわりされたりしたが、タイプ孔版印刷101頁のささやかな雑誌が印刷所から届いたときの会員たちの嬉しそうな顔がいまも忘れない。

1975年からのモンゴル文学研究の50年を語るとすれば、さらに遡ること50年、1925年にモンゴル人民共和国で始まった「国民文学」創生の流れを略述しなければならないだろう。その上で、1970年代から今日まで、モンゴル研究会文学部会のメンバーが、志を同じくする研究者をはじめ、詩人、作家などと、ともに歩んだ道程を思い出として語ることになる。次に、現在の日本のモンゴル文学研究の現在地を示す研究事例を紹介して、最後に、AI時代の人文学が直面している危機を少しく論じ、明日のモンゴル文学研究を担う若い世代への期待とエールを綴ることで、この分不相応な依頼への応えとしたい。

なお、以下、記述の都合上、人名をあげる場合、長幼、面識の有無を問わず、敬称を省くことをお許しいただきたい。お名前をあげる、あげないに拘わらず、学恩あるすべての方々への敬意と感謝は、昔も今も、これからも、決して変わることがないことを申し添える。

I. モンゴル文学研究の道程と道路元標

モンゴル文学の道路元標 (Zero Milestone)

100年前、1925年(大正14年)の日本には、既に国立の外国语学校2校に蒙古語専攻課程(東京1911年、大阪1921年)が存在した。しかし、そこではまだ「モンゴル文学」の本格的研究は行われていなかった。勿論、1907年の『成吉思汗実録』那珂通世訳注(大日本図書株式会社 明治40年1月18日発行)をもって、日本のモンゴル文学研究は既に誕生していたと強弁することもできるかもしれない

いし、語学教育の素材として文学作品が用いられることもあったろうが、少なくとも、当時、「日本文学」とか「ロシア文学」とかいう場合に概念される、民族国家の「国語」による modern literature としての概念での「モンゴル文学」は大日本帝国の官立学校の研究の対象ではなかったのである。

しかし、1925年のモンゴル高原では、「モンゴル人民共和国の国民文学」を創造するという一大事業が始まっていた。

1924年11月に世界で2番目、アジアで最初の社会主义国家として誕生したモンゴル人民共和国が「国民」創成に取り掛かるに際し、1925年、エルデニバトーハンがゴーリキーに宛てた手紙とゴーリキーからの返信によって示された方向性が、「モンゴル国民文学」を方向づける道路元標(Zero Milestone)であったと言えよう。

当時、まだ、スターリンの庇護を受ける前のゴーリキーは、モンゴル知識人に翻訳すべき書物について、以下のように忠告した。

ヨーロッパが科学、芸術、技術の領域で世界の他の諸族の先頭をきって進んだのは、けっして苦惱することを恐れず、現に所有しているものより良いものを望んできたからです。・・中略・・私の考えでは、パスカル、ファラディのような科学者と同様、フランクリン、ガルバルジーその他のような人びとの伝記が有益でしょう。こういう伝記は芸術作品に劣らず教育的に重要です。後者のうちから、正義と解放の理念の規範となる人間のヒロイズムがもっとも明確に示しだされているものを選ぶ必要があります。(松本忠司編訳 『ゴーリキイ文芸書簡II』光和堂、1973年)

ゴーリキーのこの忠告は、乱暴に単純化してしまえば、パトーナリズムの臭いのする、一種の近代化論であり、西洋モデルを踏襲する国民文学への道を示すものであった。

時代は、ロシア・アヴァンギャルド華やかな時代である。1925年からのモンゴル文学は、世界でも類をみない自由な文学の実験室になる可能性を秘めていたのだ。しかし、その事業を担うべく、エルデニバトーハンがドイツやフランスに送り出した青年たちが、西洋の文化や芸術に耽溺し、祖国の近代化を夢見つつ、西ヨーロッパ的生活を謳歌できた時代は、瞬くうちに過ぎ去った。

ソ連で「社会主义リアリズム」という用語が正式に定義される前、1920年代末から、ゴーリキーの忠告によるモンゴル文学の道標は、乱暴にその向きをかえられた。モンゴル文学黎明期の詩人や作家たちは、ヤコブソンに倣えば「詩人たちを浪費する」時代の中で政治と格闘することになった。道標が示す先は、近代西洋文学型のリアリズム文学でも、革命的ロマン主義文学でもなく、ボルシェビキの「教導」と人民革命党の「指導」の下に「資本主義を飛び越えて」存在することを運命づけられたモンゴル語版の(シニヤフスキイの言葉に従えば)「社会主义古典主義」への道であった。しかし、皆が皆、唯々諾々とその道標に従ったわけではない。

1930年代当時の普通の日本人にとって、モンゴル人民共和国は、足を踏み入れることができない国であり、その他の地域のモンゴル人たちは、自らの国家や国語をまだ手にしてはいなかった。『蒙古年鑑』(1936年)の蒙古文学の項に、小林高四郎が「偉れた民族文学の出現する日を翫望してやまない」と記したことで分かる通り、モンゴル人民共和国の「国民文学」に関する情報は日本にはほとんど届いておらず、内モンゴルや東モンゴルの「モンゴル近代文学」は、専ら、日本へ留学したり、現地の日本語教育の中で学んだりした人々に担われて、その産声をあげようとする時代である。どこの地域のモンゴル語でも、直接的な借用語表記の他の literature にあたるモンゴル語の訳語を確定できていな

かった。モンゴル文学の道の元標が建てられてから、30年、つまり、一世代を経た頃には、モンゴル人民共和国では、押し付けられたキリル文字正字法による教育の成果として、「文学」はキリル文字で、*уран зохиол* または *утга зохиол* の2語で表現されるようになっていたが、両語の違いが明確に定義されていたわけではない。モンゴル文学の道は常に「普請中」であった。

モンゴル研究会文学部会と『モンゴル研究』創刊

戦後の日本では、1960年代末、東京外国語大学、一橋大学大学院を経て、さらにドイツ留学を経た社会言語学者田中克彦（当時東京外国語大学助教授）が、一般の人々の目に触れる記事の中で、モンゴルの国民文学に触れ、D.ナツアグドルジの詩なども紹介し始めるが、モンゴル文学への関心の状況が大きく変化したのは、「日中国交正常化」、「沖縄復帰」と同じ1972年の日本とモンゴル人民共和国の国交樹立からのことである。

1970年に正式に誕生した大阪外国語大学モンゴル研究会に文学部会が誕生したのも、まさに、この年1972年である。

大阪外国語大学から東京外国語大学大学院に進み、後に札幌国際大学で温泉教授として知られるとなる松田忠徳は、1974年7月に『草原と炎 モンゴルの詩人選集』というモンゴル現代詩のアンソロジーを出版し、そのあとがきで次のように語っている。

少数民族の言語に属するモンゴル語も、他の少数民族の言語同様に、満足な辞書もなかった。国交のなかった当時、モンゴルから思うように本が手に入らず、二、三十冊注文して一冊でも届けば上出来だった。

松田は、モンゴル研究会のメンバーではなく、1975年の『モンゴル研究』創刊の頃には既に大阪を離れていたが、1970年『砂漠』誌に発表した、D.ナツアグドルジやD.ツエベグミドの作品の秋津紀穂名義での翻訳や、評論等は大阪外大の同期や後輩のメンバーにも共有されていた。（『砂漠』には、上岡好子、荒井伸一、構松源一の翻訳も掲載されていた。）

モンゴル研究会文学部会の誕生から『モンゴル研究』創刊の頃までも、まだ学生たちが個人でモンゴルの書籍の入手するのは極めて困難なことであった。学生たちは、運よく手に入れた書籍やその青焼きコピーを共有しながら、モンゴル近代文学の体系的研究に挑戦したのである。

当時、大阪外国語大学の専任教員のカリキュラム上にあったモンゴル文学史は、荒井伸一（大阪外国語大学教授）によるものであった。戦後から1960年代まで、モンゴル語の文献がなかなか入手できない時期には、ロシア語、中国語を手がかりに研究を進める他なく、『蒙古文學發展史』（巴・索特那木著、謝再善譯、上海、文化生活出版社、1954）やミハイロフの『蒙古現代文学簡史』（張草紹譯、北京、作家出版社、1958）等の文献を基に当該のモンゴル語原文にあたって作成されたノートに依っていた。

モンゴル研究会のメンバーたちは、こうした資料だけでは満足できず、文学理論研究のグループを作り、主に、1968年版のモンゴル人民共和国科学アカデミー編纂現代文学簡史の叙述と紹介によって、作品を選び、その翻訳を開始したのである。

当時、学生たちが手にしていた文献がどのようなものだったかは、学生たちのアドバイザーであり、また、対等な議論の相手でもあった山口幸二（当時、大阪外国語大学留学生別科専任講師）が書いた「1920・30年代のモンゴル文学」（「中国文芸研究会『野草』14/15号116～129頁1974年4月」）

から知ることができる。

「新しい文学は、新しい人間とともにある。現実は、たえず新しい人間を生む。文学とは、まさに、その新しい人間の考察である。」という S. ロブサンワンダン(山口の当時のカナ表記では・ルブサンバンダン)の言葉を掲げて始まるその論文の冒頭には以下の感慨が示されている。

本小論を書くにあたって、私はいま、ある大きな感慨に満たされている。いま私の手元に、600ページに及ぶ大著『モンゴル現代文学概史』(1966、ウランバートル)、作品収録数10972に及ぶ『現代モンゴル文学作品大観—1921~1965.』(1965~66)、現代モンゴルの優れた文学研究家S. ルブサンバンダンの手になる『現代モンゴル文学の英雄(主人公)』(1965)がある。更に、すぐ利用できるところに、優れた大長編小説、B. リンチンの『曙光』(1951~1955)、Ch. ロドイダンバの『清らかなタミール』(1961)を初めとした多くの作品群がある。

満足に辞書もなく、大阪ではモンゴル人の教官がひとりもいない状況で、こうしたテクストと格闘しながら、大阪外国語大学モンゴル研究会文学部会の研究活動はスタートした。

文学部会の活動最初の成果は、モンゴル研究会の文学部会発足の1972年夏合宿の報告書として発表された赤石洋通、井上清昭、石原光訳『モンゴル現代文学概史』であった。

1970年代前半の大蔵外國語大学『世界のわかものよ』には、松田(秋津)以外にモンゴル研究会の草創期のメンバーによる翻訳作品が並んでいる。赤石洋通、井上清昭ら文学部会の創設メンバーの翻訳の他にもある。例えば、D. ナツアグドルジ「正月と悲しい涙」は歴史部会の山本雅博による翻訳である。

1973年になると、新入生メンバーが大幅に増え、銘々が、印象批評、ニュークリティズム、フォルマリズム、受容理論、記号論など、まるで、筒井康隆の小説『文学部唯野教授』を彷彿させる種々様々な文学理論を読み漁り、ルカーチやバフチンを輪読したりしていた学生たちは、理論が現実のモンゴルの文学に当て嵌まるのか、否か、モンゴル文学史に取り上げられている作品の山にとりついて、翻訳を試み、飽かず議論した。

上本町六丁目から南に下り、うっかりすると見過ごしそうな小さな門から、「烈士の碑」の前を抜け、大阪大空襲の中、辛うじて焼け残った図書館と反対側の階段を昇って、戦後の安普請校舎の教室と研究室、その上にプレハブの箱を載せたような粗末な部屋で、「何故、この詩は美しいのか?」、「何故、モンゴル文学は面白くないと言えるのか?」等について真面目に議論した。議論は教室を出たあとも、戦後焼け跡の雰囲気を宿していた駅前路地の飲食街で延々と続けられた。

大阪外国語大学のモンゴル研究会は、件の学園紛争の直後にスタートし、もともとは、歴史や社会科学分野での研究を中心とする趣が強かったのだが、『モンゴル研究』の創刊号から4号までは、文学部会のメンバーの文学関係の論文や翻訳が際立って多い。

『モンゴル研究』創刊と研究会に拠るモンゴル文学の研究は、まだ、道とも呼べぬ、「けものみち」程度のものだったが、若者たちが踏みしめることで拓いた道だった。

モンゴル文学作品の翻訳の試みは東京外国語大学にも大阪外国語大学、他の場所でも、個人的な試みとしてあったし、語学学習上の素材としても存在した。しかし、『モンゴル研究』誌初期のモンゴル文学に関する翻訳や記事の数々は、ソビエト社会主义連邦や中華人民共和国からの出版物を介することなく、作品原文を読みこんで、モンゴル人民共和国の見解を批判的に吟味することから、「モンゴル

「文学」の固有の価値を探り、また、その普遍性を大系的に明らかにしようとする、日本で初めての「集団的な試み」であったと思う。

当時、モンゴル研究の世界では、歴史学や政治学、経済学、人類学、言語学の研究であれば、発表の機会はなくもなかったが、まだ周知されていない現代モンゴル文学の研究成果を発表し得る開かれた場は存在していなかった。

大阪外国语大学モンゴル研究会の歴史部会、文学部会が一緒に立ち上げた『モンゴル研究』創刊号には、学生自ら発表の場をたちあげ、日本におけるモンゴル文学研究の道を切り開くのだという強い意志と若い気負いがあった。

『モンゴル研究』No1からNo4(1975-1978)の4号だけで、モンゴル文学作品の翻訳13篇が掲載されている。ボヤンメネフ「暗黒政府」(上野敏宏訳)、ナツアグドルジ「旧き子」「恋」(芝山豊訳)「ラマの涙」(川上郁雄訳)「冬と春の叙情」(織田幸彦)、ダムディンスレン「ソリを変えたもの」(中西和隆訳)、「二人の息子」(千歳正信訳)エルデネ「太陽の鶴」(上野敏宏訳)バダルチ「香燭のともしび」(千歳正信訳)、ルハムスレン「蓄音機」(中西和隆訳)、オドバル「花束」(林茉美子訳)、ガル「笑い話」(三枝美穂訳)「昔話: する賢いおじいさん」(河口美智子)。また、この他に『現代モンゴル文学概史』関連年表1~3、ハスバートル「革命と文学」(赤石洋通訳)が連載されている。

論文では、いまも、モンゴル文学研究者が参照する赤石洋通の「ボヤンメネフ—嵐の中の帆船」(『モンゴル研究 No.2』1976年)や、中西和隆の「ダムディンスレンの『昨日』と『明日』」(『モンゴル研究 No.4』1978年)などがあり、これらは「けものみち」に咲いた野の花である。

狭義の文学研究だけでなく、芦本滋、谷博之らによる言語分会も並走していた。この言語部会は、当時の「猫も杓子も生成文法」的流行追随とは一線を画し、言語における「美」を強く意識していたように見えた。

『ロシア・フォルマリズム文学論集』が日本語訳で出版されたのは1971年、ヤコブソンの『一般言語学』の翻訳は1973年に刊行されている。言語学が必修で、嫌でもこれらに目を通していた『モンゴル研究』創刊の頃のメンバーは、口承文学を現代文学の下に置くような発想を全くもっていなかった。大阪外国语大学から大阪大学大学院を経て、後に、日本語教育分野の研究者として、宮城教育大学、早稲田大学で教授をつとめた川上郁雄の「イェルール考」(『モンゴル研究 No.3』1977年)がそのことをよく物語っている

モンゴル研究会では、多くのメンバーが歴史部会、文学部会、言語部会に重複して顔を出していたので、各々が学問領域の縛に縛られることもなく、「民俗学」や、「モンゴル民衆思想史」といった学域横断的な様々な試みを勝手放題に始めていた。

しかし、大阪外国语大学が箕面に移転する前、1970年代末になると、『モンゴル研究』創刊号の頃の学生メンバーはすべて社会に出て、生活に追われるようになった。後継者として期待された学生会員が次々モンゴルへ留学するなどの事情もあり、1979年~1981年の時期、『モンゴル研究』誌刊行は一時途絶えてしまった。

モンゴル研究会文学部会休眠期

『モンゴル研究』の定期発行が再開した1982年以降、モンゴル研究会の主流は、小貫雅男(当時、大阪外国语大学教授、後に、滋賀県立大学教授)のゴビ・プロジェクトにつながる社会科学系への研究

へシフトしていった。とはいっても、モンゴル研究会創設当時、歴史部会を指導し、学生と平場で議論をしていた小貫雅男は、京都大学大学院の学生であった頃、Ts. ダムディンスレンに関する論文を書いており、モンゴル国立大学招聘教授時代、晩年の Ts. ダムディンスレンにインタビューして音声記録をとっている。(当該資料は中西和隆の研究にも提供されたと聞いた記憶がある。)また、ゴビ・プロジェクトの頃、『モンゴル研究 No.12』1989年には、Ts. ハンドスレンとの交流を通じて、モンゴル人民共和国時代には顧みられることのなかったツェンドによる『元朝秘史』初の現代モンゴル語訳(モンゴル伝統文字表記)を写真印刷で掲載している。

『モンゴル研究』出版が滞っていた時期にも、文学研究の「けものみち」を歩む者が全く絶えたわけではなかった。1987年、拙著『近代化と文学 モンゴル近代文学史を考える』がアルド書店から出版された。これはひとえに渡辺聰の尽力によるものであった。渡辺は大阪外国語大学から初めてモンゴル人民共和国へ留学し、帰国後、大阪外国語大学大学院生として、『モンゴル研究』出版の仕事を支え、学位取得後は、モンゴルで活躍するビジネスパーソンとして、後には、モンゴル国友好勲章を受けることになった人物である。学生時代、仏教史やインジナシ(インジャンナシ)の研究していた渡辺が創設したのがアルド書店である。現在は、渡辺の大学同期でモンゴル留学組の吉本るり子が運営し、吉本周平とともに、いまも、『モンゴル研究』誌出版を支え続けている。

『近代化と文学』出版時、版下原稿は、満足なモンゴル語のフォントもなく、多言語スペルチェック一は勿論のこと、ろくな校正機能もないワープロ専用プログラムで作成されていた。加えて、当時、著者、編集者ともに、口に糊する仕事に文字通り忙殺されており、校正に時間がほとんど取れないまま、印刷所の締め切り期限を迎え、正誤表の貼り付けが間に合わなかった。東京外国語大学の岡田和行(当時、東京外国語大学専任講師)が講義の参考図書として使用した際、その誤植の多さを学生に呆れられるほどだったが、1987年のウランバートルでの国際モンゴル学者会議(現在の I A M S)の陳列台に無事並べられた。実は、説明文が全くついていなかったので、日本語の読める参加者以外には、誰のどんな本なのかわからなかったのだが、モンゴル文学史に関する日本語の本がそこに置かれているということだけで、胸が熱くなったことを覚えている。5年前の同会議で面識があり、本の中でも引用した K.N. ヤツコフスカヤに本を謹呈すると、日本語が読めない彼女は表紙のイラストをとてもほめてくれた。

その年、『モンゴル研究 No.10』に注目すべき詩の翻訳と詩人紹介が掲載された。

賀川明による「ボルジギンの蒼き草原」である。ウランバートル留学中の賀川は、冷戦下社会主义時代の制約を乗り越えて、直に詩人たちに会い、作家同盟のメンバー達との個人的な交流を通じて、モンゴル文学研究を独自の方法で拓きつつあった。

ウランバートルで賀川に会った時のことをいまでもよく覚えている。街を歩きながら、 Chernykh のノブイリ原発事故後、モンゴルに何が起きたのか話してくれたあと、強い口調で言った。「芝山さんは、確かに、 D. ナツアグドルジは讀んでいるだろうけど、いまを生きているモンゴル作家の文学をちゃんと讀んでいない。」

その頃、口に糊する仕事の他は、文学史の執筆やナツアグドルジの手稿のテクスト批判にかかりきりだったので、返す言葉もなかつたが、時代が大きく変わろうとしていることを予感させる言葉だった。

1989年、天安門事件の後、ベルリンの壁が崩れる少し前、筆者は、村井宗之、岡田和行、斎藤純

男らとウランバートルで開かれた若手研究者のセミナーに参加し、ナツアグドルジの「黒い岩」についてモンゴル語での発表を行った。2年前の国際会議で英語発表中、モンゴル語への同時通訳が放棄され、発表者のマイクも切られた経験をもつ者として、反応に一切期待はしていなかったのだが、話し終わるや、モンゴル人参加者から大きな拍手を受け、多くの質問を受けることになった。(新聞のインタビューは日本人の給料に関するものだったが。)

この学術交流は、モンゴルに限らず、他の国々のモンゴル文学研究者を『モンゴル研究』誌に結びつけた。例えば、ロシアのモンゴル文学研究者、サンクトペテルブルク大学のマリア・ペトロヴァは、後に『モンゴル研究 No.15』(1993年)に、モンゴル語で現代モンゴル詩のテーマに関する論文を投稿している。

1989年を境に、徐々に、モンゴル人の作家や研究者と「本音」で話をすることができ、真正のテクストにアクセスする可能性も増えてきた。とは言え、その後、数年、モンゴルは大混乱に陥ることになる。飛び越えたはずの「資本主義」が「市場経済」と名をかえて国民を呑み込んだ。モンゴル作家同盟も分裂してしまう。1989年にモンゴル人民共和国科学アカデミーから約束されたD.ナツアグドルジの手稿への完全アクセスが可能になったのは、それから5年も経った1994年のことであった。

その1994年、5月、筆者はD.ナツアグドルジの娘アーナンダー・シュリーへのインタビューを行っている。翌年1月、彼女の訃報を受けて、インタビューを文章化し、『モンゴル研究 No.16』(1995年)に掲載した。記事はチョルモン(現内モンゴル師範大学教授)によってモンゴル語に翻訳され、内モンゴルの雑誌に掲載され、後にモンゴル国でもキリル文字化されて読まれた。S.エルデネへのインタビューや、賀川明が日本に紹介したバボーギン・サグワスレン(文字転写表記の場合はルハグヴァスレン)と話し合いながら彼の詩を訳す機会も得たのも同じ1994年だった。これらの経験に基づいて書いた拙文は季刊誌『グリオ』(現代社会と文化の会[代表=加藤周一]、平凡社)に掲載された。そうした縁もあり、B.サグワスレンは、後に、日本モンゴル文学学会の名誉顧問も引き受けてくれた。また、彼と親交のあった、モンゴル通としても知られた詩人有馬敵との交流も生まれた。

残念だったのは、B.サグワスレンだけでなくウランバートルの作家や詩人に会うたびに、「アキラはどうしている?」と聞かれて答えに窮したことである。その頃から賀川明の消息は『モンゴル研究』編集に携わる仲間の間に全く伝わらなくなっていた。

モンゴル人民共和国がモンゴル国となってから、日本におけるモンゴル研究は、「満蒙」時代に逆戻りしたかの如く、専ら、実利的な方向へとシフトして行った。こうしたモンゴルブームの中で、モンゴル文学研究者にスポットライトがあたる機会はほとんどなかった。『モンゴル研究 No.10』の賀川の翻訳以降、1988年から2000年までの『モンゴル研究』誌に掲載された翻訳はわずか3篇である。

大学の学生の気質も変わり、モンゴル研究会の文学部会も一種、休眠状態となっていました。

『大阪外国語大学70年史』(大阪外国語大学70年史編集委員会編 大阪外国語大学70年史刊行会 1992.11)には、文学関係の教育担当者として、当時非常勤講師であった2名の『モンゴル研究』創刊時のメンバーの名をあげているが、『大阪外国語大学70年史』出版の後、一時据え置かれていた文学担当荒井伸一教授退官にともなう後任人事では、公募に設けられた不可思議な年齢制限によって、二人とも排除されていた。以降、大阪外国語大学、大阪大学外国語学部において、狭義のモンゴル文学を専門分野とする日本人研究者が専任職につくことはなかった。

モンゴル研究会文学部会再開から日本モンゴル文学会へ

『モンゴル研究』創刊から20年が経とうとする1995年、近畿は、阪神淡路大震災にみまわれた。関西在住の研究会員も多く被災者となった。筆者は、サバティカルの米国研修中で、幸い家族は無事だったが、拙宅、実家ともに全壊認定を受けた。想像を絶する事態に、急遽の帰国前後の記憶が定かではないが、国内の友人、知人をはじめ、モンゴルや米国の友人たちからの暖かい励ましを得て、被害のほとんどなかった箕面の大坂外国语大学に出講するようになると、意外にも、学生からモンゴル研究会文学部会を再開したいという希望が寄せられた。学生の強い熱意に押され、震災の傷跡が生々しく残るJR芦屋駅前の倒壊を免れたホテルのティーラウンジで文学部会が再開された。

その後、徐々にメンバーも増えてモンゴル研究会の文学部会は完全復活したのだが、1997年度末から筆者が関西を遠く離れることが決まり、モンゴル研究会文学部会の運営をどう維持するのか、頭を抱えることとなった。当時、未だ、ブロードバンド接続はなかったものの、日本でもインターネット時代の幕があがり始めた頃であった。物理的な空間の制約を超え、WEB利用とフェイス・トゥー・フェイスの集まりのハイブリッド型研究会を世界的な規模で構築しようとの構想が生まれ、早速、試行に移すことになった。

1998年、清泉女学院短期大学(現在の清泉大学)に事務局を置いて、日本モンゴル文学会が創設された。翌年には、『モンゴル文学を味わう』(国際交流基金アジアセンター)の編著者である東京外国语大学の岡田和行、上村 明、海野未来雄ら旧知の面々の協力を得て、なにかにつけて、角逐する関係と思われがちであった大阪外国语大学と東京外国语大学の出身者が協力しあって、所属の枠を超えて、広く開かれた枠組みで結集し、自由にモンゴルの文学について語りあう日本モンゴル文学会の活動が始まった。

日本モンゴル学会もまだ公式のWEBサイトを立ち上げていない頃で、「日本モンゴル学会を検索すると、日本モンゴル文学会のサイトが出てくるのはけしからん」などというお門違いの文句を言ってくる人さえいた。この手のクレーマーはいつでもいる。『モンゴル研究』と称する学術雑誌は本誌の他にも幾つかあるのだが、創刊は大阪外国语大学モンゴル研究会が最も古い。創刊時より、国立国会図書館に送本し、『史学雑誌』の回顧と展望にも記述があるのだから、ちょっと調べればわかることなのだが、ある団体が、こちらが正統な『モンゴル研究』だから、そっちが名称を変えろと言ってきたこともあった。

開設間もないWEBサイトは、原始的な方法でHTMLを自分で書いていたが、要領の悪さを見かねた松本在住の大阪外国语大学出身田渕人司(信濃むつみ高校)が一時助けてくれた。

さらに、東京外国语大学側では岡田和行(当時東京外国语大学助教授)、大阪外国语大学側では谷博之(当時大阪外国语大学非常勤講師)とゴビ・プロジェクトの今岡良子(当時大阪外国语大学専任講師)の協力を得て、東京と大阪での定期的な研究発表会の実施が実現した。

この頃、モンゴル人民共和国時代の官製文学史とは異なる、新しいモンゴル国の文学史が続々と出版されていた。そこには、かつては言及されることのなかった文学理論からの分析もあり、文学用語の刷新も始まっていた。こうした部門の第一人者のひとりがD.ガルバータル(当時、モンゴル国立大学教授)である。1994年のモンゴルでの調査研究中に世話をした彼が東京外国语大学の招聘教授として来日することとなり、岡田とともに日本モンゴル学会にも参加してくれた。大阪、東京の外国语大学の学生だけでなく、様々なバックグラウンドをもつ人々がモンゴル文学会と関わるようになって

いた。大阪外国語大学の招聘教授、B. サラントヤー（当時モンゴル国立大学准教授）、サイチンガ研究の都馬バイカル（現桜美林大学教授）など、モンゴル地域への留学経験者や、それら地域からの日本留学経験者、在日本のモンゴル人研究者など、国籍や所属を問わず、様々なモンゴル文学に関心をもつ人々が参加することとなった。

21世紀に入った2001年の春・秋の文学会の記録を見ると、岡田、芝山を除く発表者は、荒井幸康、内田孝、海野未来雄、オンドルナ、ガルバータル、佐々木友香、谷博之、二木博史となっている。発表者の他にも多くの参加者があり、その中には、後の日本モンゴル文学会を支えることになる大切な人々がいた。

『モンゴル文学への誘い』出版

日本モンゴル文学会のメンバーは、モンゴル人民共和国・モンゴル国の国民のみならず、さらに広義のモンゴル人の作品も視野に入れた、より広義な「モンゴル文学」という視点から、翻訳と論文に資料を付した出版物を企画した。

当初、当時大阪外国語大学大学院博士課程の学生であった内田孝の詳細な文献表や翻訳予定作品リストを基に計画検討が始まったのだが、残念ながら、内田の構想を十分に生かしきることができなかった。幾つかの出版社に打診したが、結局、商売にならないと断られた。最後に、佐藤紀子（日本モンゴル文化経済交流協会設立者）と一緒に仕事をしていた内田敦之の紹介で、『差別語からはいる言語学入門』（2001年）の出版で田中克彦とも親しかった明石書店創業者石井昭男社長に直談判し、『モンゴル文学への誘い』（明石書店 2003年）の出版が決定した。なんとか、初版を売り切ることができ、2013年には誤植の修正や資料を増補したオンデマンド版も制作された。

初版の出版に際し、前年の「学術奨励賞」副賞賞金をほぼ全部使い果たしてしまったのだが、これは、学生時代に、手弁当体制で、『新蒙日辞典』をつくり、手売りしていた精松源一（当時大阪外国語大学名誉教授）を見ていたせいで、「モンゴル関係の出版とビジネスが一致しない」という思考回路が頭の中にできてしまっていたのかも知れない。後日、出版に詳しい執筆者の一人から「詳細な出版契約書を作成することの重要性」について友情溢れる忠告を得て、なるほどと大いに啓蒙された。執筆者全員の善意と寛容に助けられたのだが、ビジネスセンスが全く欠如していたが故に、当時、担当を引き受けてくれた大江道雅（現明石書店社長）に無理を言って、出版界の常識を全く無視した、翻訳アンソロジーと研究論文集と資料集をひとつに詰め込んだ本を作ることができたのかもしれない。

かくて、松田忠徳・蓮見治雄・荒井伸一編訳『帽子をかぶった狼 モンゴル短編集』（恒文社 1984年）とは全く異なるタイプのモンゴル文学の紹介の本が世に出たのである。

当時、筆者は、大学設置の仕事に忙殺されて、最終校正作業にほとんど出られず、共編著者である岡田、明石書店の佐藤和久ら在京の方々に過大な負担をかけてしまったが、おかげで、阿比留美帆、荒井幸康、内田孝、内田敦之、海野未来雄、谷博之、津田紀子、深井啓、山本裕子という多彩な執筆者を得て、インジャンナシの紹介、半ばカノン化した作品から、70年代悪女小説、現代詩、ブリヤート、カルムイクの文学、児童文学、留学政策、オニゴー、最新のクイア理論に至るまで、広く一般の読者に現代モンゴル文学の輪郭を感じてもらい、今後の研究に資する詳細な資料をも付す、世界でも類を見ない、ユニークなモンゴル文学案内を世に送りだすことができた。

モンゴル研究会文学部会発足から30年が過ぎ、大阪や東京の大学だけでなく、多くの場所で、道半

ばで、研究を離れざるを得なかった諸先輩、後輩諸氏の思いも繋ぎ、さまざまな枠組みを超えて、文学を愛する人たちを「モンゴル文学の愉しみ」へ誘い、日本とモンゴルを結ぶ新たな道への道路元標を据えることができた。この出版を評価し、2006年、モンゴル作家同盟は編著者2名へ「文学功労賞」を贈っている。

日本モンゴル文学会『モンゴル文学』誌発行

『モンゴル文学への誘い』出版以降、日本モンゴル文学会は、モンゴル作家同盟をはじめ、同盟から離れたグループの人々、そして、作家 G. アヨルザナの村上春樹の翻訳などを生むことになる日本文学をモンゴル語で紹介する立場の人々との交流も深まった。芥川龍之介のモンゴル語訳で受賞している L. アディアスレンら優れた才能の持ち主も多く貢献してくれた。

モンゴル国作家同盟幹事長チラージャブからの祝辞も掲載された日本モンゴル文学会の機関紙『モンゴル文学』創刊号は、『モンゴル研究』創刊から35年の時を経た2010年に発行された。

荒井幸康(当時、北海道大学スラブ研究所研究員)が発行実務にあたった『モンゴル文学』第2号出版の頃、谷博之が、『モンゴル文学』誌の翻訳編を構想し、WEB 上での翻訳配信の試みを始めていた。モンゴル文学の普及に重要な意義をもつこの企画は、残念ながら、谷の急逝によって、継続が困難となつたが、彼の試みは、2017年ロドイダンバ基金によってウランバートルの ADMON 出版から刊行された《現代モンゴルの小説》『私たちの学校』(Ch. ロドイダンバ著、タニヒロユキ訳)に結実している。

幾多の困難を乗り越え、日本モンゴル文学会は発展を続け、藤井真湖(愛知淑徳大学教授)の協力で名古屋でも研究発表会が開催された。また、テレングト・アイトル(北海学園大学教授)の協力により札幌の北海学園大学人文学会との共催での国際シンポジウムを実施した。さらに、その成果を中心とした論文を収めた『モンゴル文学』第3号は、内モンゴル師範大学教授ドロンテンゲルらの尽力により、2018年、中国で印刷された。

翌2019年6月にはフフホトでの国際モンゴル文学研究会の実施、2023年8月には日本モンゴル文学会50周年記念国際学術会議がウランバートルで開催され、「モンゴル文学研究国際協会」が設立され、日本モンゴル文学会から会長、事務局長2名が運営評議会メンバーとして指名された。かくて、日本のモンゴル文学研究の細くて長い道に、国際ハイウェイへ合流する新たな道路元標が置かれた。

2025年11月には、日本モンゴル文学会は、モンゴル国との共催でナツアグドルジ生誕120年記念へ向けた学術会議をウランバートルで開催した。このタイミングで、日本モンゴル文学会現会長岡田和行に松田忠徳以来2人目となる D. ナツアグドルジ賞が贈られた。

こうした発展が可能になったのも、『モンゴル文学への誘い』以来のメンバーたち、わけても、WEB サイトの維持をはじめ、縁の下の見えないところで、献身的な協力をおしまなかつた、深井啓、阿比留美保、荒井幸康らの支えがあったからである。

筆者は、日本モンゴル文学会を代表する仕事を、岡田会長、アイトル事務局長に任せ、コロナ禍以降は、幾つかの国際会議に、名誉会長として挨拶文を書いたり、ビデオレターで挨拶をしたりすることしかしていない。最新の国際学術情報については、『モンゴル文学』や『日本モンゴル学会紀要』の学術情報欄等に詳細が記されているので、そちらをご確認いただきたい。

II. 日本におけるモンゴル文学研究の現在地

『日本モンゴル映画祭』から

2025年7月、『日本モンゴル映画祭』と銘打って、モンゴル映画の1週間連続上映企画が第七藝術劇場で行われると聞き、出かけてみた。劇場の前で、大阪外大モンゴル語OBの後輩二人と出会った。その日、老人たちが一緒に見た映画は、バトバヤル・チョグソム監督の『ホワイト・フラッグ』(2023年)という作品だった。

見終わって、これから、飲みに行くという比較級で若い二人と別れた後、十三から神戸方面に向かう電車の中で映画を反芻した。

この作品の監督が、アメリカ映画や西ヨーロッパ映画だけでなく、ロシアや中国などで作られたモンゴルを描いた映画もしっかり見て育った人物であることはよく分る。映画は、それなりに楽しめましたし、懐かしいモンゴル的な光景、モンゴル人演者の演技にも好感がもてる。しかし、すべてで、「あの映画のあの場面だよね」というほど、はっきりと指摘はできないのだが、幾つかの映像表現に既視感を覚えた。少し辛口に言えば、映画をお勉強してきた優等生的な要素と、丁寧に扱うべき素材を粗雑に放り出したようなところがあるというところだろうか。WEB上で読んだ英文のレビューも同じような点を指摘していたように思う。

勿論、こうした印象批評に大した意味はないのだが、やはり、一番気にかかったのは、タイトルである『ホワイト・フラッグ』である。

監督が来日して、初めて日本でこの作品が公開された折も、観客から、原題の意味を問う質問がでたようだが、監督は賢明に明言をさけたらしい。

監督と脚本を兼ねるバトバヤル・チョグソムはスイスで生活しているモンゴル人らしく、WEB上のインタビューにも英語で答えており、日常言語としてはドイツ語やフランス語ではなく英語を使っているのかも知れない。映画の原題はモンゴルでも、英語の White Flag だという。この映画の製作国(資本を出した者の帰属)は、モンゴル、スイス、日本となっているので、モンゴル語の題でもよかったですはずだが、何故、モンゴル語での「白い旗」ではなく、White Flag だったのだろうか?

筆者は、この映画のタイトルから、「我らが勝利」(阿比留美帆訳 『日本とモンゴル』(139号・140号合併号 2020年)という J. ルハグワの小説を思い浮かべた。

ハルハ河戦争(ノモンハン事件)に従軍し、勲章を授与されているデンデブ爺さんは青空市場で、自分も貰うはずだったがなにかの手違いで貰いそこねた《我らが勝利勲章》(対日参戦勝利勲章)が売りに出されているのを見て、買おうとするのだが、モンゴルの通貨では若い売り手に相手にされず、勲章は目のまえで、日本人の観光客にドル札で買われてしまう。かつて「白地の旗」を掲げて降った日本人が、緑色の札をかざせば、勝ちだというのかと自問しながら市場を去る。

この映画は、犯罪ミステリ仕立てなのだが、ラストは、かなり、open-ended である。監督としてはラストの解釈やタイトルの意味するところは観客に委ねるということなのだろう。しかし、タイトルが英語の White Flag である以上、それは敗北宣言、休戦要求を意味するはずで、「白い旗」は乳製品販売中だとか、映画の文脈上の別商売の営業中とか、あるいは清浄性や完全性のメタファーだとかではないだろう。White Flag が明らかに、降伏を意味しているのであれば、一体、誰が誰に降伏するの

か・・・銃を背負い全裸で馬を駆って駅に向かう女は勝者なのか、敗者なのか、刑事として殺人犯を追い詰めた男は勝者なのか、敗者なのか、女を裏切った女は敗者なのか、勝者なのか、抑圧者や裏切られた者は・・・

モンゴルの映画としては、珍しく LGBT を描いた作品として賞を獲得したというこの作品で扱われる要素は、女性への暴力、同性愛者への差別、都鄙の生活格差、繰り返される不倫、愛の不毛といったことであり、とりわけモンゴル的なわけではない。

世界中どの国にでも存在し、人々を苦しめている課題である。つまり、国民性だと、民族文化とかとは無縁の、現代の人類にとって普遍的な課題、つまり「わたしたち」の問題である。

日本モンゴル映画祭のフライヤーが謳うように、「モンゴルってどんな国」がこの映画から分かるとすれば、「モンゴル人もわれわれも同じなのだ」ということであろう。

2025年、柚木麻子や王谷昌の小説の英語翻訳が高い評価を受けたことが報じられたが、その作品が日本的であるから評価を受けたわけではない。それは受賞対象となった作品を読めば明らかだ。日本語の読者も英語の読者も、とてもなく奇異なキャラクターにも抵抗なく、自己を投影することができるのだ。道具立てや場所の他に、多少の「日本らしさ」があるとしても、作品理解の鍵になるようなことはない。

彼女たちの書く小説は、かつて、西洋文学モデルを通して形成されてきた国民文学としての「日本文学」の中の作品であると同時に、運命共同体的地球市民社会全体を包含するマーケットの中のコンテンツなのである。

White Flag を鑑賞して、いまから、30年以上前の「モンゴル映画祭」のレビューとして、雑誌に掲載された海野未来雄の「モンゴル映画人たちの息吹」(Image Forum 93・Dec pp.56-59) という記事のことを思いだした。

海野は、『モンゴルの息子』(1936年)との比較を通じて、『ゴビの蜃気楼』(1980年)を評して次のように言う。

モンゴル人と土地という問題は、実は我々日本人の感覚と大分異なっている。・・中略・・それは一族と言う集団としての土地への関係性ではなく、個人的な一对一の関係性なのである。この映画ラストシーンで、一度は故郷を離れる決意を固めた運転手を、結局は再びゴビに引き戻したのは、娘に対する慕情といよりもそうした慕情の染み込んだゴビという大地そのものであったのだ。そして、この映画が単なる恋愛喜劇を超えて一種の哀愁をもって私たちに迫つて来るのは、人間と大地という根源的なつながりを、ゴビ地方の自然の中にこの監督が描いてみせたことによる。

White Flag では、海野のいうモンゴル的特性である個人と大地の関係が見てこない。主人公が辿り着く場所は田舎と都市を結ぶ鉄道の駅である。

個人的な人間と大地という根源的なつながりは、45年程の間に失われてしまったということなのだろうか?もし、そうであったとしても、White Flag の制作者は、それを嘆いているのだろうか?

余所者のモンゴリストは誰でも、多かれ少なかれ、モンゴルやモンゴル人の文化の中に、なにかしら、他とは違う弁別的な特徴、つまり、「モンゴル的なもの」を見つけることへの期待に応えようとする無意識の癖のようなものをもっているのではあるまいか。

文学研究に限らず、これまでの日本のモンゴル研究にそうした傾向があったのではないか。文学研

究の場合、それがかえって、モンゴル文学を一般の読者から遠ざけてきたのではないか。最近、モンゴルからの招待をもらっても、なかなか腰があがらないのは、長年、モンゴルに対するオリエンタリズムを批判してきた自分が、「逝きし世の面影」を今日のモンゴルの中に見られないことを恐れているのではないかと思うことさえある。

これはあくまでも個人的、あるいは世代的な問題であって、一般化できることではない。

今日の日本のモンゴル文学研究の水準を示すのは以下のような取り組みである。

阿比留美帆の仕事

阿比留美帆（東京外国語大学非常勤講師）は、間違いなく、現在、日本のモンゴル文学研究の分野で最もアクティブに活躍している研究者、翻訳家の一人である。

最近、活字になった翻訳、紹介だけを列記してみる。

2024年11月 佐野洋子作『100万回生きたねこ』をモンゴル語に翻訳、モンゴルで出版。

2025年1月「モンゴルの現代詩」としてウランバートル出身の若い世代の詩人から B. バトザヤ、J. テグシザヤ の詩を翻訳、紹介。『モンゴルウォーカー Premium Vol.4』モンゴルウォーカーマガジン株式会社。

2025年5月「モンゴルの現代詩」D. オリアンハイの詩11篇を翻訳、紹介『日本とモンゴル No.145』モンゴル協会。

2025年6月「自然を想う抒情詩」B. ヤボーホラン、D. ニヤムスレン、L. ウルズィートウグスの詩を翻訳、紹介雑誌『TRANSIT 68号』。

書店葉々社主催の「アジアの文学の日」トークイベント。モンゴル文学や注目の作家について紹介。

2025年9月 L. ウルズィートウグスの短篇「アクアリウム」の翻訳、紹介 『翻訳文学紀行 VII』ことばのたび社。

これら活字メディアだけでなく、「モンゴル・ポエトリーナイト」、「モンゴルの詩をよむ会」などを継続して開催し、そうした取り組みの中では、Jazz 奏者、馬頭琴やオルティンドーなどの若いモンゴルアーティストとコラボし、また、その活動に関する情報を、SNS を通じて広く発信している。

重要なことは、これらの活動の結果として、多くの人が「モンゴルの文学を読んでみたいな」と思い、WEB 上の彼女の訳した詩や小説を通じて、モンゴル文学ファンになっているという事実である。

こうしたことは、20世紀末、日本モンゴル文学会が WEB ページを立ち上げたときに夢想したことではあるが、当時、それはまだ夢の領域にとどまっていた。

日本におけるモンゴル文学研究の現在の到達点を示すに足る「モンゴル文学のファンを増やす」という仕事を軽やかに(本当はとても大変な苦労を伴うのだろうが)行っている阿比留の仕事の具体例をひとつ紹介しておきたい。

「ジェンダーの視点からモンゴル文学を読む：近現代小説の中の<女性像>を中心に」(北方民族文化シンポジウム網走報告 37巻 2024年)と題する研究発表である。

阿比留は、その中で、1940年代、Ts. ダムディンスレン描いた女性像と1960年代、Ch. ロドイダンバの描いた女性像を比較した後、「民主化」後2000年代の女性像として、女性作家 L. ウルズィートウグス(1972-)の2002年の短編小説「アクアリウム」をとりあげている。

「アクアリウム」という作品は、「ある日突然魚に姿を変えられた“私”が、子供部屋の小さな水槽か

ら覗きみる家族の姿に一喜一憂し、また人間に戻るまでの様子が一人称で語られる。カフカの『変身』をオマージュした小説と紹介される。(全文の翻訳は『翻訳文学紀行 VII』ことばのたび社所収)そして、以下のように言う。

先に挙げた二つの作品(引用者注「ソリを替えたら」「清きタミル川」をさす)とは表現手法も主題も異なるが、先の二つの作品にはある意味、理想の女性像が描かれていたとすると、ここでは妻の目からみた自分と他者の関係性、人がもつ二面性、自己像と実像のずれという視点が描かれている。物語のラストで、“私”が再び魚になることを選択し、今度は「もっと小さな水槽を」と望む行為は、現代の都市空間における孤独と閉塞感を象徴すると同時に、妻や母という役割から離れた「個」としての自分とは何かを問いかけるようである。

女性の身体感覚や内面を纖細に描くことで、ウルズィートウグスの詩や小説は「女性的」、「女性ならでは」と形容されがちだが、そうした安易で二元論的なレッテル貼りを拒むかのような、あくまで「個」を掘り下げていくスタイルこそがこの作家の持ち味であると言つていい。彼女は詩、小説のジャンルでジェンダーを含む様々な固定観念に縛られない自由なイメージに溢れる作品を発表し続けている。

阿比留が指摘するように、L. ウルズィートウグスのような今日的な(contemporary) モンゴル文学を読むとき、他のすべての国や地方の「いま」の文学と同じ目線にならざるを得ないのである。そこでは、もはや「モンゴル的なもの」探しは主要な課題ではない。

都会の個の孤独と憂いを同時代の地球市民と共有するモンゴル人には、海野の語った「人間と大地という根源的なつながり」は喪失されているとも言える。

勿論、モンゴル人のすべてがというわけではない。『日本とモンゴル No.145』(2025年)では、阿比留はタイプの全く異なる男性詩人の紹介を行っている。1941年生まれの伝説的文学学者ダムディンスレンギーン・オリアンハイである。

阿比留はオリアンハイの詩の翻訳に付した詩人の紹介文にこう書いている。

「モンゴル最後のマルキシスト」を自称するオリアンハイの思想の根幹には、「この世界の何ひとつとして私が所有するものはない」という考えがあり、“私有財産”という概念が人や社会を冷酷でエゴイスティックなものにすると説く。国の高位の賞にノミネートすることを推薦者方に打診されるも、「私は祖国を心から尊ぶ。だが、国が貧困者や浮浪児を一人も出さない社会を実現できないうちは、私は国からの賞は受けない」と言って固辞したというエピソードは有名で、信念に基づく一貫した態度は多くのモンゴル人の畏怖と尊敬を集めている。

モンゴル現代詩を代表する詩人のひとり、牧民の子、オリアンハイは、今日の平均的モンゴル人とは異質の存在である。だからこそ、畏怖の念を抱かせるのである。しかし、それをモンゴル的な特質と呼び得るだろうか?いや、そうではあるまい。実存的な問いを抱き続け、世に抗って、詩を書き続ける行為は、古来どのような属性の人間集団においても、普遍的な営為であり、それこそが、詩人を詩人たらしめているのだ。

モンゴル文学を読んでみたいという人たちがいて、詩人や作家のこころに寄り添う誠実な翻訳者が

いれば、モンゴル文学は、翻訳を通して、「世界文学」として存在する。ただ、それは世界市場で高い商品価値をもつということと決して同義ではないのである。日本の市場でのモンゴルの文学にはいまだに「モンゴル的」が求められている。

だからこそ、阿比留の仕事に倣う人々が次々に出てくるようになればよいと心から思う。

文学作品の翻訳は面倒である。翻訳である以上、読み違い、誤訳やケアレスミスは訂正し、翻訳のルール違反は互いにチェックし合わねばならない。しかし、なにより、文学作品は文学として翻訳されねばならない。テクストに現れる文学の言語は日常の言語から「異化」されたものなので、缶詰の開け方の翻訳と同じようにはいかない。その点で、阿比留の翻訳には「文学を文学として訳す」ことへの覚悟を感じられる。

モンゴル文学を扱う人間が度々経験し、時として萎縮してしまう要因のひとつは、モンゴル語が出来る「識者」から「ケチ」をつけられることである。

確かに、稀に、モンゴル文学をマイナーな存在と高を括り、先行の日本語訳やロシア語訳の検討もろくにせず、しつゝ、英語訳から重訳したり、学生の下訳を適当に手直しをすればよい程度に考えたりする紹介者が出てくる可能性はあるので、批判が全て悪いというわけではない。しかし、「何故、この語をこう訳したのか、この語の本来の意味はこれ、これであり、こう訳したのでは全くの誤訳だ」とか、「このセンテンスは、文法的に、これ、これの構造になっているのに、こんな風に訳すと原文の形が再構成できない」とか、果ては、「こんな意訳は論外だ」と言ったような指摘まである。

「そこまで言うなら、手前が全部訳してみやがれ！」と言い返すかわりに、つっこみを回避するために日本語にモンゴル語のルビをふったり、あえて、逐語直訳的に訳したりする人もいる。しかし、それでは商品レベルの文学作品の翻訳にはならない。原語の文学性を別の言語の中の文学性に翻訳して送り出すのが文学作品翻訳者の使命である。

筆者はお金のとれる翻訳家ではないのだが、モンゴル語聖書翻訳に関する本を出してしたりしているので、時折、間違って、翻訳のアドバイスを求められることがある。答えはいつも決まっている。「文学性の巧拙やセンスを気にするより、まず、自分の訳文を何度も声に出して読んで下さい。言語の芸術は、とりわけ《声のある文学》の特性を残すモンゴル文学の場合、文字よりも音が命です。臆病になつてはいけません。オリジナル言語の文学性と日本語の文学性の対話を経験できることこそが翻訳者の冥利なのですから。」

しかし、こうした面倒で面白い文学の翻訳や研究の仕事がいま大きな岐路に立たされている。

III. 人文学を襲う津波とこれからのモンゴル文学研究

人文情報学という津波

半世紀前、『モンゴル研究』創刊の頃、大阪外国語大学には、ワープロもPCもなかった。学生時代、θとΥを追加したロシア語仕様特注品のオリベッティ社のタイプライターを大学生協で大枚を払って購入した。勿論、手動である。

ワープロが登場してからも、最初の頃は、モンゴル語は、ローマ字転写するか、キリル文字に自作の外字を組み込むか、しか方法がなかった。PCが使えるようになっても、伝統モンゴル文字のフォントを自作したり、その印刷画面確認のために、Macのモニタースクリーンを物理的に90度回転させ

たりしなくてはならなかった。そんなことをいまの若者に話しても、「五右衛門風呂の下水板」並みにイメージできないに違いない。

今日では、D.ナツアグドルジを日本版 Wikipedia で検索し、ヒットした項目からモンゴル版 Wikipedia へジャンプさせ、そのモンゴル語記事をブラウザの機械翻訳機能で日本語にして、二つの記事の相違点を書きだすのには数分あれば十分だろう。まさに、隔世の感である。

Google 翻訳にモンゴル語のサービスが加わったばかりの頃、メールを書くのに使ってみて、ほとんど使い物にならないと思ったことを覚えている。しかし、いまでは、機械翻訳は遠隔会議の字幕に使えるほどの精度までできていると言う人もいる。確かに、以前はモンゴル圏の知らない人から日本語で送られてきたメールが機械翻訳によるものだとすぐに分かったが、最近では判断が難しい。少なくともビジネスレターや缶詰の開け方くらいなら、機械翻訳でも全く問題ないレベルまでできていることは間違いない。多言語対応の機械翻訳が文学作品に及ぶことはもはや避けられない。

しかし、便利な世の中になったものだと安閑としていられる文学者、文学研究者はどれくらいいるのだろう

いま、あらゆる国や地域の文学とその研究に、新たな危機が津波の如くおし寄せている。

デジタル技術や AI を使った人文科学分野の「イノベーション」が、デジタル・ヒューマニティーズ、デジタル人文学とか人文情報学とかいわれるもののトレンドとなって、知的な領域をのみこもうとしているのである。

例えば、日本では、2025年7月、著作権保護期間が満了した文学作品を収集・公開する「青空文庫」のデータを、大規模言語モデル(LLM)と検索拡張生成(RAG)技術を応用し、対話形式で探索・分析できるAIシステム「Humanitext Aozora」が開発され公開されたと報じられている。

この「Humanitext Aozora」には、以下のようなモードがあるとされる。

Q&A モード：テキストに関する事実に基づいた問い合わせに対し、簡潔な回答と正確な典拠(作品名、該当箇所など)を提示する。事実確認や情報収集に適している。

詳細解説モード：文芸研究者のように、複数の典拠を比較・分析し、時代背景や文脈を補足しながら多角的な解釈を提供する。作品理解を深めるための補助ツールとして機能する。

対話モード：指定した作家(例：芥川龍之介)や作中の登場人物のペルソナ(文体、思想、口調)を AI が再現し、利用者との対話をを行う。文学の世界への没入体験を提供する。

創作モード：指定した作家の文体を AI が分析し、そのスタイルを模倣した新しい文章を創作する。文体研究や創作活動の支援を目的とする。

そして、これらのモードは、「単なる情報検索ツールに留まらず、利用者が文学作品と多角的に関わるために新たなインターフェースを提供するものである。」と説明されている。(https://humanitext.AI/ja/apps/aozora/)

こうしたトレンドは、既に10年ほどまえから始まっている。2016年から、情報・システム研究機構・データサイエンス共同利用基盤施設において、国文学研究資料館が中心となって推進する「歴史的典籍 NW 事業」や「日本古典籍データセット」で、古典籍の画像データをダウンロード可能な形式で提供し、くずし字を対象とした文字のデータセットを公開し、機械学習を用いた文字認識や、テクスト化に向けたアルゴリズム開発のための学習データとして使用可能にしている。

ことは文学のことだけではない、WEB を覗いてみると、驚くことに、哲学専攻の研究者も LLM の

AIを駆使して、効率よく論文を書くことを勧めているのである。

当然、中国は、こうした分野への研究投資を前のめりに進めており、各大学でも多くのシンポジウム等が行われていると聞く。モンゴル国においても、写本や印刷物のデジタル化はかなり前から始まっているので、日本の文学での取り組みに類することへの用意はあるはずである。

いまから、20年ほど前、2006年、モンゴル建国800周年にして、D.ナツアグドルジ生誕100周年記念の年、筆者は、1920年代末から1930年代末頃に書かれたD.ナツアグドルジの手稿のデジタル・データ研究の重要性についての発表をウランバートルでのモンゴル学者会議の席上、英語で行った(『モンゴル研究 No 24』2007年に日本語版掲載)。

劣化が急速に進む歴史資料である文学者の手稿をデジタル化して保存し、併せて、手稿のデジタル・データの解析と色調操作により、上塗り削除された部分を再構成する試みの可能性についてである。

科学アカデミー言語文化研究所のKh.サンピルデンデブとアイメジャーの一ノ瀬修一、凸版印刷株式会社(現在のTOPPAN)の加茂竜一、通訳者としてナチンションホルらの協力で作成した高解像のデジタル・データとその分析、再構成のヒントは、すべて、モンゴル科学アカデミー言語文化研究所に提供し、その後の成り行きに注目してきたのだが、いまだ芳しい報告を受けていない。当時の責任者であり、共同研究者であったKh.サンピルデンデブが2006年冬の北京での国際学術会議をまたずして急逝し、筆者と科学アカデミーのやり取りを詳しく知っていたはずのプレブジヤブも不慮の事故で世を去ったいまとなっては、モンゴル国でこの仕事を引き継ぐものがいるのかどうかさえ分からない。

20年前の提案は、いま、AIの力でもっと簡単に実現させることができる。伝統モンゴル文字のモンゴル語のコーパスとナツアグドルジの全草稿のデジタル情報をAIに学習されれば、ぼんやりとしか見えなかつたものが、ありありと見えてくるはずだ。筆跡についても、真筆が確認し得るナツアグドルジの手帳のデジタル化は既にできているので、筆跡を鑑定することは容易で、様々な印刷草稿の書き手がナツアグドルジ本人であるか否かも簡単にわかる。

さらに、同時代の詩人、作家の手稿の学習により、AIは文体や発想の典拠についても明らかにする可能性が高い。ナツアグドルジが後の世代にどのような影響を与えたかも分かる。(直接与えた影響は、想像されるほど、大きくなかったことが明かされるだろう。)

しかし、こうした作業を本当に実りあるものとするためには、研究を情報技術者とアルゴリズムにだけ任せておくことはできない。

AIが何を学習すべきなのか、そのデータを吟味していなければ、AIの出す答えは無意味なものになる。1940年代後半から今日に至るまでモンゴル語で書かれたD.ナツアグドルジと彼の作品に関する記事はまさに山ほどあるが、正確な情報や、文学的な価値のある論考は極めて少ない。引用に引用を重ねたバイアスだらけのデータを、とりあえずAIに放り込んで、Deep Learningさせても、アウトプットされる情報は真実とは全く似ても似つかぬものになるだろう。

かつて、洋の東西を問わず、文学研究は、古典や作家の著作を、写本や手書き草稿から、校正原稿、印刷各版各刷りに至るまで蒐集し、それらを比較検討し、本文となるテキストを定め、一生をかけて語彙や用法を抽出し、カタログ化するような仕事の上になりたっていた。今日、こうした仕事の多くは、徒労であり、そんな非効率な仕事をする、お金を生み出さない学域には、「イノベーション」が必要だと思われているのである。

AI利用で、今はノーコードの時代になったと言われる。LLM(大規模言語モデル)の登場により、

プログラミングの知識なしでソフトウェアを開発できるようになったからである。しかし、AIが勝手に作りだした芥川龍之介の実存的問いに答えて、小学生がAIとの対話により創作した芥川風の小説を芥川の筆跡で生成した画像データを、未発見の草稿のコピーと峻別するのは一体誰の仕事だろうか？コードを書くか否かは別にして、道具を使うのは人間であり、AIもそれを認識している。

最も注意すべきことは、AIは意識をもたないという事実である。将来、AIが意識をもつと主張する研究者もいるが筆者はそれを信じない。AIは自分が人間によって作られたことを正確に理解しているからである。従って、AIが実存的な問い合わせもちたくても、もつことはできない。おのが存在の神秘を問わない意識は意識ではない。意識がなければ、何が美しいのか自分で決められないし、美を味わうこともできない。それでもAIは、尤もらしい文章を拾い出して、まとめを作り、さらには意識らしいアルゴリズムをつくり出すかも知れない。しかし、AIに真に実存的な問い合わせがないことを、われわれが知っている以上、当然AIもそれを知っているのである。

スピリチュアル・キャピタルを満足に持たぬ無定見な人々によって、ノーム・チョムスキーでさえ、あるいは、チョムスキーだからこそ、厳しく批判した大規模言語モデル(LLM)に依拠した人文科学のAI化が推し進められていくなら、文学部が次々に閉鎖され、既に廃墟同然の高等教育機関において、文学の研究や教育はさらに厳しい状況に追い込まれるだろう。

新自由主義者が保守主義者を僭称する世の中である。ソ連崩壊直後のように、詩人や学者が国家のリーダーになることはもはやなく、大国のリーダーに品格を求めるなど望むべくもない時代だからこそ、哲学や文学の価値が見直されなくてはならないと、多くの人々が気づきはじめている。

いまのところ、モンゴルが受け入れ、育んだ「遊牧」というイノベーション以上にモンゴル人の幸福を実現し得えた産業的イノベーションは起こっていないように思える。

遊牧民あれ、農民あれ、狩猟民や漁民あれ、工場労働者あれ、ケアワーカーあれ、ブルシットジョブ管理職あれ、人間と大地という根源的なつながりの喪失と回復は、世界のすべての人々にとって、普遍的な課題である。

これからモンゴル文学の研究の目指すのは、AIによる機械翻訳の精度をあげることでも、モンゴル的なもの探しでもない。それは、モンゴルの詩人や作家がいかに、人間と大地という根源的なつながりの喪失と切り結んでいるかを、人間の生身を通して明らかにすることではないだろうか。

おわりに

50年前に大阪外国大学モンゴル研究会の文学部会の学生たちによって、拓かれたモンゴル文学研究の細い「けものみち」は、他の人々が拓いた道と交わり、いまや大道となった。これから、さらに、遠くまで進んでいくだろう。

モンゴル研究会文学部会も、日本モンゴル文学会も、「制度としての学問」のための権威主義的な所謂「学会」ではなくて、モンゴル語とモンゴル人の言語芸術、最も広義の文学を愛する人のする人たちが、なんらの束縛も受けることなく、自由に語りあえる場所であった。どうか、これからもそういうものでありつづけてほしいと、切に願っている。

50年前の学生たちはモンゴル研究に必要なものを自分で作ってきたのだが、筆写するより、コピーをとった方が早く、効率的だと思ったし、貴重な講演はノートをとるより録音する方が正確だからと

大きなカセットデッキを担いで講演会場へ行った。高校生の頃、知的生産の技術で推奨されていたのは京大型カードをカードボックに並べることだったが、いろいろ便利な道具が登場するたびに嬉々として使い、生産性の向上や効率化ができたと思った。

しかし、中等教育、高等教育現場の職責をすべて終える頃になって、ようやく分かってきた。人文知、あるいはエピステーメーとも呼ばれる学知にかかる仕事において、「効率化」や「イノベーション」が何をもたらすのかということを。それは人々のこころの果てしない荒廃である。

常にイノベーションを求め、求められ、「業績」をあげることが自分の存在証明だと信じて、グローバルな市場の中で、搾取に甘んじ、収奪に加担することにさえ無頓着になる人々が多いことか。せめて、その人々が幸福を感じていればよいのだが、実際にはそうでもない。

だが、悲観するのは止めよう。これを読む若い人たちがいたら、どうか忘れないでほしい。

学問は苦行ではない。学問は人類の共通善に資するものであり、人生の喜びである。その証拠に数十年前に『モンゴル研究』に投稿していた学生が、ビジネスキャリアを全うしてから、紙の辞書の埃を払い、好きな詩の翻訳に再挑戦して、『モンゴル研究』最新号に新訳を投稿している。市井にあって様々な仕事をこなしながら、常に学び続け、喜寿に近づいてなお大学院で学び続けている研究会発足時のメンバーもいる。

人は幾つになっても学べるのである。非人間的なシステムに「自發的隸従」することなく、自信をもって、自分の好きな不便で非効率的なやり方で、あなた自身が拓く「けものみち」を歩んでほしい。

ただし、誰かが拓いた道も同じ道を通る者がいなければ、やがて、草木や砂に埋もれてしまうだろう。「けものみち」を共に往く仲間があれば、どんなに細い道であろうと目的の場所まで辿りつけることを『モンゴル研究』の50年の歴史は教えてくれている。

今日、高齢化が進む国々の学術団体はどこでも、組織の世代をこえた継承に困難を抱えている。モンゴル研究の領域とて例外ではない。「時代が変わったから」と言って止めるのは簡単である。しかし、モンゴル研究会は、いつも簡単な道を選ばない。

創刊50周年を迎えた今年、また、あらたな1冊の編集に取り組むモンゴル研究会の勇気と努力を称えるとともに、創刊号編集者を代表して、深甚の感謝を捧げたい

(しばやま ゆたか)

《翻訳》

ヒュルヒュル風

Д.ナツアグドルジ
(訳) 織田 幸彦

ヒュルヒュル風、まだ吹いている

ポツポツ雨、まだ降り止まぬ

さやさやと風、まだ吹いている

ポツポツ雨、まだ降り止まぬ

山越えの風が北から

兆しの風は南から

夕霧の冷たい風が上から

跳ね返りの冷たい風は下から

原題 Сэр сэр салхи (Д.Нацагдорж) 1923年

本誌第4号掲載の拙訳「希望」は春到来の歓びでしたが、その対になるような冬の始まりの歌です。

本作は歌劇のテーマ曲ですが、作者は別の人という学説もあります。革命前夜の苦難を隱喻しているとも言われています。いずれにせよ動画サイトで20以上の動画が検索されるのは、未だ流行歌として愛されている証しえですね。なお第一連の、擬態語「ヒュルヒュル」と「さやさや」については、映画プロデューサー・ヒシゲー (С. Батхишиг) 氏の助言をいただきました。

(おだ さちひこ)

《翻訳》

すべての子供たちよ(ピオネール唱歌)

Д. ナツアグドルジ
(訳) 織田 幸彦

みんなみんな 子供たち
紅く飾った 花園で
初のお披露目 開演だ
演舞の祭典 楽しもう、さあ始まるよ！

真っ赤な血潮のその中に
人民革命 行き渡り
清らで澄んだ 心にも
人民教育 すぐすぐと、さあ始まるよ！

新品 紅いリボンだよ
清風受けて 翻る
新生のびのび 子どもたち
しっかり見詰める 心の眼、さあ始まるよ！

斑色した 小太鼓が
タンタン 鳴るよ 一斉に
一人残らず 子どもたち
愉快に楽しく 踊り出す、さあ始まるよ！

(次頁につづく)

革製ボール 転がして
見事な演奏 相まって
遠く輝く 未来の日
掴む子どもは 私たち、さあ始まるよ！

並んで集合 整列だ
一人残らず 子どもたち
実った学習 めきめきと
英雄革命 脈々と、 さあ始まるよ！

原題 Бүх олон багачууд аа : Пионерын дуу (Д.Нацагдорж) 1925年

.....

訳者は1957年生まれなので愛国歌で習ったのは「君が代」ぐらいです。昔放送部員だった時、体育祭で行進曲などのレコード音源を本部席で再生しました。行進曲でよく使われていたのが「手のひらを太陽に」。作詞は「アンパンマン」のやなせたかし氏です。♪みんなみんな生きているんだ、ともだちなんだ・・・と歌った少年時代は幸福でした。

選集(1961年刊)の29頁に掲載。「みんな」「子どもたち」「革命」「赤」など愛国唱歌の定型語を取り入れながらも、視覚的に子供たちの想像力を育む内容になっています。原文は歩調が取れるように、きれいに頭韻が施されています。翻訳は「七五調」にしてみました。

(おだ さちひこ)

《翻訳》

お母さん

Д.ナツアグドルジ
(訳) 織田 幸彦

モンゴルの 見目麗しき お月さま
私を産んだ お母さん

ほんとに素敵な 旋律で
ねんねんこりりん お母さん

その柔らかく 白い手で
私を育てた お母さん

正しくきれいな お言葉で
手を取り教えた お母さん

原題 ミニй ээж (Д.Нацагдорж) 1935年

母を「恋うる」作品が私たちに投げかけるのは、その無償で限りない愛情と犠牲に、子は十分応えているのか?という問い合わせかもしれません。♪母さんが夜なべをして・・・の歌い出しに誰もが聴き入ってしまいますね。詩の力がここにも遺憾なく發揮されています。

Ц.Дамдинсүрэн 編集による選集(1961年刊)の140頁に掲載。訳文は七五調にしました。動画サイトで検索すると実際に多くの歌手がカバーしています。母と娘の歌という印象を持ちますが皆さんはいかがでしょうか?

(おだ さちひこ)

《翻訳・昔話》

手なし娘

(訳) 吉本 るり子

むかしむかし、海の北に王さまの国がありました。海の北の王さまには15歳の王女がいました。王女は太陽も見えず、風も吹きこむことのないガラスの館で、気ままに暮らしていました。海の南にもまた、王さまの国がありました。海の南の王さまには15歳の王子がいました。その王子は、海の島にある庭園のなかの館に住み、書物を読み勉学に励んでいました。

ある時、海の北の王さまは、3年の任務で家を留守にすることとなりました。家を立つとき王妃に、「では私の娘をよろしく頼む。3年たったら帰ってくる」と言いました。

王妃は、王女の継母でした。王女を嫌い、王女に危害を加えることをいつも考えていました。そうしたところ、ある日、王の館で穀物の収穫をしていると、穀物の中から一匹の大きなネズミが出てきました。ネズミをつかまえて王妃に見せると、王妃はネズミを殺させ、前歯を折り、その前歯を取って置きました。

そうこうして、3年の任務を終え王さまが帰って来ました。

「私の娘は元気だったか?」と王妃にたずねると、王妃は「元気だったのでしょう。あなたの娘がこのような歯をもつものを産みました」と言って、例のネズミの前歯を取り出して見せました。王さまはそれを見て、大そう怒り、娘を呼んで来させ、牛車に乗せ二人の従者に連れて行かせました。

王さまは自ら刀をとぎ携えて、その後を追いかけ海辺に行き、娘を牛車から降ろし殺そうとしました。娘は泣いて「殺さないでください」と父親に命乞いをしました。父親は殺すのをやめ、両腕を切り落とし、娘を置き去りにしました。

王女は両腕を失い悲しんで、海に入って死のうと身を投げましたが、溺れることなく浮かんで流されて行きました。

ある日、海の南の国の王子が庭園の端を散歩していると、海の方で人が流されて行きました。海から引き上げてみると、肩から手のない娘でした。「君はいったいだれなの?」と王子が尋ねると、

「父親が私を殺そうとしました。私が命乞いをすると、両腕だけ切って置き去りにしました。私は水に入って死のうと思い海に転がり落ちたけれど、溺れずに浮かんで漂い、流されてきたのです」と言いました。王子は娘を館に入れ、腕の傷の手当をしてやり、娘と一緒に暮らしました。

そうしたある日、皇帝のお触れが出て、右翼の官吏が亡くなったため、息子を持つ王の王子たちを集め、試験が行われることになりました。王子は皇帝の試験を受けに行き、優秀な成績を収めて、皇帝の右翼の官吏に選ばされました。王子が家を出るとき、手なし

娘は王子の子どもを身ごもっていました。子どもを産んで3年が経ち、王子は数ヶ月の休暇を貰って家に帰って来ることになりました。そして、「何月何日に家に帰る」と記した急ぎの手紙を使者に託しました。使者は道中一軒の家に立ち寄りました。その家には中国人と女が住んでいました。二人は示し合わせ、使者に酒を飲ませ眠らせて、手紙を奪い読みだところ、皇帝の右翼の官吏が両手のない妻に宛てた手紙でした。この中国人の妻は手なし娘の継母でした。「いや、両手のない娘というのは例の娘かも知れない。手紙を書き換えておこう」と考え、”私が帰るより先に、手なし娘を追い出せ”と書いて手紙を元のように戻しておきました。使者は起きて王さまのところに行き、手紙を渡しました。王さまは手紙を読んでたいそう怒り、「どういう訳で救い、どういう訳で追い出せというのか？ともかく息子の妻と子どもをザヤタイン寺に連れて行って置いてこよう」「息子が帰ってきてからどうするかを決めよう」と考え、手なし娘を子どもとともに連れて行き、置いて帰りました。寺に残された娘は考えました。

「私を騙してここに置いていった。あとで私を殺すつもりだろう」と子どもをおぶって寺から出て行きました。そうこうして息子が家に帰って来ました。父の王は怒って息子を殺そうとしました。息子は事の次第を話しました。それならば急ぎの手紙を届けた使者を呼び、尋ねる必要があるとして来させたところ、急ぎの手紙の使者は、かくかくの家に立ち寄りましたと言いました。それで中国人と女を捕え連れてきて尋ねると、二人は手紙をすり替えたことを白状しました。それで女の首を切り、中国人には杖をつかせ水のないゴビに追放しました。それから妻を救いにザヤタイン寺に行きましたが、妻はいませんでした。

「ああ、もういなくなつたのだからどうすることもできない。しかし、1、2か月の間、貧しい者たちに食べ物を配ることにしよう」と考え、領内に施しのお触れを出しました。

手なし娘はこの施しのお觸れを聞いて、「この施しに行けたらいいのだが、私の素性がすぐわかってしまう」と思い、子どもをおぶって、海に沿って歩いて行きました。ある日のどが渴いてたまらなくなり水を飲もうとしましたが、低い水辺を見つけることができませんでした。「仕方がない」と子どもをある場所に座らせておいて、自分は水面の方へと頭を下げました。手なし娘はあっという間に水の中に落ちてしまいました。すると落ちた側の腕が生えてきたような気がしました。娘が起き上がって見ると、片方の手がありました。娘は喜び、それでまた頭を下げて反対の側から水に落ちると、もう片方の手も生えていました。娘は両手を得て喜びました。「そうだ！ これなら私だと気づかれまい」と息子をおぶって施しの場所に行きました。父の王さまの館に行くと、壇の入口のところで母の王妃が車に積んだ金銀を貧しい人々に配っていました。娘が息子とともに王妃のそばに行くと、王妃の衣のすそをつかんで、「お母さん、お母さん」と大声を出しました。

王妃は驚き、子どもと娘を見ると、手なし娘とそっくりで、しかも娘には両手がありました。王妃は王さまと王子を呼びに行かせました。ふたりは出てきて娘を見て、娘だと知り、家に連れて入ってお祝いの宴を開きました。そして、王子は妻と子どもを連れて皇帝の任務に行き、そこで楽しく幸せに暮らしました。

原題 Гаргүй хүүхэн

出典：Монгол ардын үлгэр，Улаанбаатар：Улсын хэвлэлийн газар，1982.

同書の解説によるところの話は、昔話(үлгэр)の語り部(үлгэрч)トグトール Тогтоолの昔話集 "Ардын аман зохиолын эмхэтгэл, 1949" に掲載されたものである。

.....

「手なし娘」の昔話は、『グリム童話』として知られているグリム兄弟の収集した昔話集にもあり、類似の筋書き、モチーフをもつ話が世界的に広範に存在する(アメリカの民俗学者 Stith Thompson の "The Types of the Folktale" では分類番号 ATU 706 に分類されている)。また、地域、地域で様々なバリエーションがある。日本の「手なし娘」の話でも、日本の村が舞台ではあっても、手なし娘が村の酒屋の娘で相手が別の村の酒屋の若旦那だったり、手なし娘が峠の茶屋の娘で相手が猟師だったりと、聞き手の心に浮かぶ情景が異なるのだ。

モンゴルの「手なし娘」の昔話(үлгэр)も、この翻訳の上記の出典の話と、日本語訳のある『モンゴル民話研究』(D.ツェレンソドノム編；A.ロブサンデンデブ監修；蓮見治雄訳註)掲載の「手なし娘」とは細部がかなり異なる。モンゴルの「手なし娘」の昔話(үлгэр)を集めてみたいと思う。モンゴルの豊かな口承文芸の世界への私の第一歩として。

(よしもと るりこ)

《雜 感》

モンゴル小周遊記

曾 芳子

はじめに

2025年8月、私は生まれて初めてモンゴルの地に足を踏み入れた。二十歳そこそこの若輩の身では知らぬことなど溢れるほどあるが、モンゴルについても同様に、ただその音の響きを知るだけだった。モンゴルに行くことを志したきっかけは、2024年まで遡る。大学一年生の後期、今岡良子先生が開講する「遊牧民の文化と社会を知る」という講義の授業項目で掲げられた『四季 遊牧 1982 ツエルゲルの人々』と冠したドキュメンタリー映画のタイトルに惹かれて、受講したのが始まりだった。それまでは遊牧民の暮らしについて茫漠とした印象をとどめるに過ぎなかった私に、映画に登場するツエルゲル村の人々は、次から次へと鮮烈なイメージを与えた。彼らはネグデルから独立し、共同体を立ち上げ、そして学校までも自らの力で設立したのである。それは新しい社会の無からの創造に他ならない。これは、よほどの「生きる力」がなければ、成しえないことである。既存のレールに取り囲まれてきた私に、彼らの姿は、「生きるとはどういうことか」「豊かさとは何か」、という根源的な問いを突きつけてきた。厳しくも雄大な自然に抱かれて、新しい生き方を模索した彼らの足跡をたどりたい。この衝動に駆り立てられるまま、今岡先生に連絡を入れ、その半年後の2025年8月13日、私はついにモンゴルへ旅立つこととなったのである。

これは、映画を通して受け取ったツエルゲルの過去、そしてモンゴルの現在に思い馳せながら経験した数々の邂逅と、悠遠なる大自然への感懐を述べた回顧録である。

■ 首都ウランバートルへ：8月13日～8月16日

この旅は、今岡先生のフィールドワークに私が同行させてもらうといった形の2人道中であり、ウランバートルを始点とする。

そこでお世話になったのは、ザヤさんとツェネさん、そして2人の娘であるアズザヤーちゃん。一家に連れられてウランバートルの観光地とその近郊を訪れたが、やはり私を圧倒したのは、街や人工物を囲む自然風景である。下側には濃い緑と赤茶の地が続き、視界の殆どを覆う蒼穹に白雲が悠々と流れる。ピクニックをするために郊外に車を走らせ、遠くに莊重な山々をたたえた風光明媚な草原の上に降り立つと、自然の雄大さというものが、確固たる質量をもって迫ってきた。遙か遠方に人工物がポツンと佇んでいるが、大地のもつ威容に今にも飲み込まれそうである。

この大地を見ていると、自らが行動して生き抜こうとしないと生きていけないのではないか。そう伝えると、ザヤさんはその通りだと渾みなく答えた。生きること、生き方、生活そのものが学びだ、と。

自分の生活を思い返す。私の暮らしへは、人間が作り出したもので埋め尽くされている。いわゆる文明の利器と生活システムを利用し、それに則って歩みを進めていく。利便性が極まっているから、必然的にあらゆるもののが効率化されて、行うタスクも増える。無駄がなくて充実した生活だと言う人もいるかも知れない。だが、考える暇がない。今この瞬間は、「次へ進む」ためのステップであり、それが終わるとまた更なるステップへの準備が始まる。ライフステージという言葉がそれをよく表しているだろう。生活そのものを省みる時間は、今のところない。そして、自ら行動することよりも、既存の選択肢の中でいかに自分が上手くやっていけるのかを考えるようになる。私は日々の生活から何を学び得ているのだろうか。果たして私は人生を生きているのであろうか。それとも、充実しているように見せかけて、ただ消費しているだけなのだろうか。

そういうことを取り留めもなく考えながら、ウランバートルを取り囲む自然の雄大さに感動したことを探した。すると、ここはまだ観光地で本当の自然じゃないよ、と笑われてしまった。少しの羞恥ずかしさと共に、これから向かうバヤンホンゴルの大自然へと期待が高まる。

■ バヤンホンゴル県ボグド郡：8月16日～8月17日

朝8時、ムンフバドさん（映画の登場人物である前郡長さんの息子さん）の車に乗り込み、遙か先、バヤンホンゴル県ボグド郡へと向かう。車窓を流れる景色は、刻一刻とその姿を変えていく。目に染みるほど深い青空のもと広がる平坦な大地に、その上を僅かに彩る緑と菜の花の黄色。大石が寄り集まったような形をした岩が点在する場所を通り抜け、車は段々と高度を上げていく。ついに標高2000メートルを超えると、ぐんと空に近づき、天空が大地に迫り来るような錯覚を覚えた。中国の諺に、「杞憂」という言葉がある。中国古代の杞の人が、天が崩れ落ちてきはしないかと心配をしたことから、する必要のない心配をすることを指す。だが、所は違えど、その人物が味わった感覚を今までに味わっているようだった。時刻が夕暮れ時に近づくにつれ、薄鈍色の雲から黄金の光が差し込み、天使の梯子を型どる。自然の雄偉への畏怖と尊崇の念が湧き上がると同時に、大きな虚脱感のようなものが込み上げてきた。この広漠な大地の中にもし独り取り残されたら、自分は生きていけるだろうか。恐らく、いや間違いなく不可能だろう。そもそも自然と自分自身との規模の違いに当たられて、少し自分を見失いそうになる。

自分が今まで考えてきたこと、積み上げてきたと思ってきたもの、それらは一陣の自然の息吹のうちに吹き飛ばされてしまいそうだ。圧倒的な威力をもつ天地に軽い目眩を覚えながら進み続け、ウランバートルから約11時間、とうとうバヤンホンゴル県ボグド郡中心部へ到着した。そこでは、映画に登場したドラムドルジ前郡長さんとヨンドンダシさんが出迎えてくれ、お二人の娘さんの家に1日の間だけ宿泊させてもらった。

翌朝、ドラムドルジさんが宿泊場所にやってきて、これから郡中心部の案内をしてくれると言った。恥ずかしながら、私はモンゴル語を理解し話すことはほとんどできない身であった。（道中は常に今岡先生に通訳していただいた）それでも、そんな私のすぐ側に腰掛けて、今から色々見せてあげようと語りかけてくれたドラムドルジさんの物腰柔らかな姿に、思わずほのかな嬉しさが込み上げてきた。ムンフバドさんの運転する車に再び乗り込み、映画に出てきた郡の様子を見て回る。学校や病院、そのほかの公共施設などなど。映画では見られなかった中心地の細部が、自分の記憶する映像を補完す

るようにくっきりと形を成していく。

郡中心地に滞在するも束の間、今度は別のご家族の所へ向かう。出発前、ドラムドルジさんに名前を尋ねられた。今岡先生が記してくれたモンゴル語の私の名前をじっくり眺め、その発音を何度か確かめると、おもむろにこう述べた。「千人の顔を覚えるよりも、一人の名前を覚えなさい」と。それがどのような真意をもつのかは分からぬ。それでも、この雄大な自然を生き抜く中で学び得た、生き方についての教えたと思った。大学には、さまざまなきっかけで知り合った人が多数存在する。大学以外でも、あらゆる場面で多くの人と出会い、顔見知りになる人間は増えるばかりである。それでも、私がその名前を迷うことなく挙げることができる人は、その中の幾人ほどであろうか。もし私が相手の名前をしっかりと覚えていたら、きっとその人も私のことを記憶してこの名を呼んでくれるだろう。名前を覚えることは、人と人の結びつきを深くするのではないか。当たり前のことがだが、日常を過ごすうちに見失っていた気がする。モンゴルでは、～さんのところの〇〇さん、という語り方をよく耳にした。これは家系と名の記憶であって、その人のルーツの保存を意味するのではないか。この中心部に来る道中で、自然に圧倒されて、自分自身を見失いそうになったと述懐した。しかし、私がある人の名前を覚えて、そしてその人が私の名を記憶して呼んでくれるのならば、少なくとも自分が誰であるのか、迷子にならないで済むのではないか。

押し寄せる思念を心の内に感じながら、温かなドラムドルジさん一家に別れを告げ、更なる旅路へと着く。

■ ゲルでの生活、そして遊牧：8月17日～8月22日

新たに私たちを迎えてくれたのは、シャグダルさんとシュレーさん夫婦だった。シャグダルさんはよく冗談を飛ばし、シュレーさんはそれに常に笑い声を上げるような、賑やかな2人である。彼らの車に乗って、これまでの人生にないほどの縦搖れと横搖れを経験しながら平野を駆け抜け、壮麗な山嶺へと登っていく。標高約2500メートル地点にある彼らのゲルに到着した時には、見上げた夜空に無数の星が瞬いていた。

翌日、ゲルで初めての朝を迎えると、昨夜は夜陰に隠れていた周囲の景色が、透明度の高い紺碧の空の下に広がっていた。ゲルが位置する谷間に両側から見下ろすような山の急斜面に、その間から覗く遠くの荒原。ゲルの裏手の地はささやかな緑に覆われて、空の青、丘陵の茶とともに複雑な景観を織りなしていた。ヤギや羊たちが、切り立つような斜面の上を悠々と闊歩する。映画の映像でも彼らが斜面を歩く姿を見ていたが、実際に斜面の勾配を目にする、映像の比ではない。どうやったらあんな急な傾斜の、しかもかなりの高所に行けるのだろうかと驚嘆していると、シュレーさんが乳搾りをしにバケツを持ってスルスルと斜面を登って行った。自分も頑張って後ろに着いていく。ただ登っていくだけなのに色々なことに気付かされる。普段、舗装された平坦な道ばかり歩いている時には少しも考えしたことなどないが、ここでは自分でしっかりと足場を見極めないと危うく滑り落ちそうになる。何処が安全か、安全そうに見えても実は危ない足場はどれか、そして目的の場所に辿り着くために最も効率よく行ける行き方はどれか。頭で考えるだけでなく、身体の感覚も重要になってくる。斜面の表面を観察して、ルートを組み立てて、そして身体の感覚を頼りに実際に歩みを進める。ウランバートルでザヤーさんが言っていた言葉を思い出す。生活そのものが学びだと。この大地で生きてき

た人たちは、彼らを取り巻く自然環境がどんなものであれ、日々の生活の中で絶えず自分の感覚を元に、自分自身で判断を下すという習慣を培ってきたのだろうか。それは紛れもなく、生活から学ぶということなのではないか。

昼下がり、1人の青年が馬に乗ってゲルにやってきた。シャグダルさんの息子、トゥグルドウルさんである。シュレーさんが取り出した羊やラクダなどの皮を使って、ゲルの中で馬の鞍を作り始めた。少ない道具を頼りに、皮をなめしていく。手元にあるものだけでなく、ゲルの骨組みやベッドの脚までも道具にし、全身を使って無駄なくスイスイと作り上げていく。先ほど、私の日本での生活は利便性の極みだといった。便利なもので溢れて効率化が促されていると。しかし、そうではないのだとふと思った。ここでは、必要最低限のものであらゆることを行える。行えるというよりは、そうするために自分で頭と身体を使って、探し出していく。だからその行動と思考回路に無駄がない。そしてこの上なく合理的で効率的なのである。便利なものに頼らないと効率化は図れないという思いこみをしていたことに気がつく。身の回りのことのほとんどは、最低限の道具と自分の身体、そして工夫する頭でなんとかなる。ものに満たされた生活をしていると、ものがなくては不便なのではないか、と考えてしまいそうになるが、そうではないのだろう。その生き方が、生活が理にかなっているからそもそもものを必要としないのではないか。そもそも、物で溢れている生活が優れていて当然だと考えること自体が大いに傲慢なことなのだろう。ふと頭の中に二つの姿を思い浮かべる。一つは、ゲルで馬の鞍を作っていた青年の姿。もう一つは、教室に入って十数年もの間ひたすら黒板と机に向かい続けてきた私たちの姿。どちらの生き方が正しいとか、優れているかとかそういう話ではないが、世の中を生き抜いていく力がどちらにあるかと言われると、答えは明白な気もする。自分の暮らしと前提としていたことが相対化される心地よさに酔いしれ、明日はどんな風景と出会いが待ち受けているのか、密かに期待が膨らむ。

そして明くる朝、今日もまた目に痛いほどに澄み切った青空のもと、1日が始まった。本日は近隣のゲル回りへ。3つほどのゲルを回ったが、その中にはシュレーさんの兄であるガナーさんのゲルもあった。ガナーさんは私をバイクの後ろに乗せて、道なき道を縦横無尽に走りながら、自身の箱庭(といってもかなりの広範囲にわたるが)をガイドツアーしてくれた。見渡す限り続く峻厳な山脈と、鈍く光る陽光。厳しくも大地を吹きつける風の唸り声以外、聞こえるものは何もない。さまざまな環境問題が深刻化する今、人間が自然を侵し、両者の関係は切っても切り離せないというが、ここに来るとういう感覚は消え去りそうになる。人間と自然を同列に並べるなんて、いさかおこがましいのではないかという思念が湧いて出てくる。この揺らがない天地自然が存在して、そこに築き上げた人間社会は、ほんの仮住まいでしかないのではないか。いつまでもこの悠久の場所に留まっていたいと願いつつ、後ろ髪を引かれる思いでそこを後にした。ガナーさんのゲルに戻ると、デールを取り出して私に着せてくれ、さらには馬にまで乗ってくれた。補助つきながらも馬に乗って少し動いてみると、周りの人々は歓声を上げて喜んでくれる。つられて自分も満面に喜色の笑みを浮かべた。賑やかで温かな経験を後に、その後も数日をかけてさまざまな家族を回っていく。雲が大地に肉薄し、その影の黒と緑のコントラストが美しい荒原にただずむ小さなゲル、山の麓に並ぶバラックの小屋、低い砂の段に囲まれた空間に鎮座するゲルとバンなど。途中、幾度も親が留守で、子供だけがゲルの切り盛りをしているのを見かけた。なんの指示がなくともステータスアイを出し、テキパキと客人をもてなす。映画で見た子供達の姿と重なった。自分が今何をすべきなのかきちんと理解している様子を見ている

と、思わずハッとしたし、自分の行動を省みたくなった。すべきことを見つけて自分から行動を起こすということは、誰にでもできるように見えて実はそうではない。いわゆる「指示待ち人間」なるものになってしまうのである。常に、誰かに指示を仰いでひたすら待つ。それは自分が何をしたらいいか分からぬという言い訳と、責任を負うことの恐れ、そして誰かが何かしてくれるだろうという他力本願に依存した思考の停止からくるものもある。だが、責任を負わない人生が果たして何になろうか。楽なことばかりを選んで思考停止することは、それは本当に「楽なこと」なのか。他人の指示通りに動いた果てに、「自分自身」には何が残るのか。思考はぐるぐると巡る。そうこうするうちに、気がつけばゲル生活の終わりが段々と近づいてきた。

激しい風雨がゲルを襲った次の日、とうとう秋が到来した。かなり冷え込みが激しく、朝などは歯の根が合わないほどだ。霧か靄に見紛うような乳白色の雲が、風に吹き飛ばされて次から次へと視界から消えていく。大きな白雲が、すぐ側の丘陵の斜面を這うように流れてきた。日本では見上げることしかできなかった雲と大空が、すぐそこに存在している。遠くに目を遣ると、谷間から覗く荒原に雲の陰が映り込み、大地がまだら模様を描いていた。翌日には秋营地へと移動するため、ここでの自然とも間もなくお別れである。数にして1週間にも満たない短い期間であったのに、不思議と私の内を流れる時間はゆっくりで、まるで1ヶ月も滞在していたかのように感じた。それはきっと、煩わされるものが少なかったからであろう。インターネットも繋がらない自然豊かなこの場所にいると、他人との関係や世間体といったものは意識の中から淘汰され、思考は自ずと自分の内へと向かう。日本で生活していた時、どうしても世間が、他人が、といった基準で物事を考えてしまうことが多かった。しかし、ここに暫くいると、自分は何がしたいのか、自分は何をすべきなのか、といった「自分」に視点が向くようになってきた。それは決して自己中心的になることを意味しない。自身の「軸」は何なのか、ということを考えるようになったのだと思う。物の豊かさの代わりに、内側の豊かさがゆっくりと広がっていく感触がする。

厳しくも美しい秋晴れの1日は矢の如く過ぎ去り、秋营地に移動してわずかに一夜を過ごした後、とうとうこの荘厳で雄大な場所とも別れを告げることとなった。旅もいよいよ終盤、映画の主だった登場人物であるツェンゲルさんとバドローシさんの元へ向かう。

■ ツェンゲルさんとバドローシさん：8月22日～8月25日

ボグド郡中心地、シャグダルさんとシュレーさんの定住地で1日お世話になった後、いよいよツェンゲルさんとバドローシさんの住む地方都市へ。早朝6時半に出発し、濃く鮮やかに燃ゆる朝焼けの中、相乗りの車で進んでいく。街に着くと、バドローシさんがお知り合いの車で迎えにきてくれた。映画の中の面影を強く残している。明るくはっきりと、そして非常にテキパキとした喋りをする矍鑠とした人だ。住んでいるゲルに案内してくれると、ホッと一息するのも束の間、バドローシさんは仕事のために出ていった。現在は肉を切り捌く仕事をしているそう。とても体力の要る大変な仕事であろうが、そんなそぶりはおくびにも出さずに次々と仕事をこなしてゆく。それでながら、私たちに向かって快活に喋りかけてもてなすことにも心を尽くしてくれる。彼女の身体には、エネルギーが満ち満ちて迸っているようだった。忙しなく行ったり来たりを繰り返しているのに、それがバタバタして見えないから不思議だ。お世話になった遊牧民の方がそうであったように、元々遊牧民の彼女

も、無駄がなく非常に効率的であるからだろう。そして夕飯には羊肉と野菜の炒め物、白ごはんに海苔のふりかけをご馳走してくれた。ちなみに炒め物の野菜は不格好ながら、私も剥くのを手伝ったものである。これがまたこの上なく美味しい。忙しい身でありながらこれほど素敵な手料理まで振舞ってくれることに、感謝で胸を打たれる。ここでもまた、ある思念がふと頭をよぎった。学校の友人と将来について話すとき、必ずと言っていいが、高収入を得て安泰で好きなことに浸れる生活がしたいということに行き着く。つまり、日々の忙しない労働から解放され、人生の余暇なるものを存分に手に入れたいということなのだ。そこは、お金との自由に満ち溢れた所なのだろう。しかし、その地位を手に入れたとて、果たして本当に自分は幸せなのか。己の幸せと人生を価値づけるのは、本当にそういった享楽なのか。勿論、自分は親の庇護のもとのうのうと暮らしている身であるから偉そうなことをきけた口ではない。だがしかし、人間を決めるものは、やはりその人の生き方そのものなのではないか。“幸せそうに見える”生活は人生の基幹を成し得ない。人生の主たるものは、その人の、人生に、そして今ある生活に対する姿勢なのではないか。バドローシさんの姿は、己が今できることに尽くしているが故に、これほどまでに力が漲り生き生きとしているように感じるのだろうか。映画の中で、大平原の上で生活していた時の環境とは全く異なるが、それでも映像で見た彼女と現在の彼女の姿はブレることがなかった。そうして映画の記憶と現在が交錯する感覚を味わいながら次の日を迎えると、その夜、とうとうツェンゲルさんが帰ってきた。映画ではまだほんの赤ん坊であったサンギ坊も今や立派な大人で“サンギさん”となっていた。バドローシさん、ツェンゲルさん、サンギさんの一家と先生と私で、賑やかに食卓を囲む。彼らは3年後、どうやらかつてのツエルゲル村があつた場所に家族全員で行く予定らしい。願わくば、私もツエルゲルを抱いた大地をこの目に収めたいと、心の底から思うばかりである。気がつけば夜も更け、出発の日が近づいていた。

■ 再びウランバートルへ、及び帰国：8月25日～27日、そして現在

26日朝、バドローシさんとツェンゲルさんに車を出してもらって、ウランバートルへ向かうバス停に到着。どんな場所で生きていても、その揺らがない軸、その人の本質とでもいべきだろうか、そういうものを沁み沁みと胸の裡に感じながら、ついに別れの挨拶を告げた。首都への帰途、バスの上できまざまな思いや思念が取り留めもなく脳内に浮上しては消え去ってゆく。ただぼんやりと、何かに思いを馳せることのできる心の余裕と思考のゆとりが生まれたことを嬉しく思った。来た時と同じように、刻一刻と移りゆく景色を眺め続ける。約12時間、ウランバートルの果てしなく続く渋滞を潜り抜けて、ついにツェンゲルさんの次女、ハンドさんの家に辿り着いた。ハンドさんは映画の中で最もよく目で追っていた人物である。当時、幼い少女であった彼女も、今は強い光をその眼差しに湛えた4児の母になっていた。彼女の家族たちは、今年生まれたばかりの女の子の双子を中心に回っているように見える。私が双子の愛らしさに目を奪われている間、先生や双子の赤ちゃんの相手をするハンドさんやつれあいさんに代わり、年上の子供たちが何も言われずとも後片付けをしたり、次のご飯の支度をしたりし始める。遊牧の地で見た子供達と同じように、自分のなすべきことを自分で見つけ、行動しているのだ。これは、ツエルゲルの雄大な大地を育ち生き抜いてきたハンドさんの賜物だろうか。思わず背筋が伸びる。残念ながら、彼女の家にはほんのわずか、1日だけ滞在するに留まった。3年後、ツェンゲルさんたちがツエルゲル村に行くときには、彼女の双子はどれほど成長しているだ

ろうか。若く活気に溢れた家ともここでお別れだ。

旅の最後は、モンゴルでの生活のスタート地点、ザヤーさんとツェネさんの家に舞い戻ってきた。もうすっかり馴染みになったもので、居間のソファに座って特に何をするでもなく、ゆったりとテレビを眺める。寂寥感もあれど、それを上回るほどの素敵な出会いの温かさと経験に、むしろ喜びの余韻が広がる。もう、思い残すことはない。それと同時に、この地に再び立つことを胸に誓った。

27日夜、私はついに日本の関西空港に帰還した。ここで、私のモンゴル周遊は終わりを告げる。だが、生活はまだまだ続く。そしてその中に、モンゴルの地での邂逅と経験は間違いなくゆったりと、しかしながら力強く息づいていくのだろう。

さいごに

日本に帰国して数ヶ月、ある授業で教授が私にこう尋ねた。「日本は豊かな生活水準を誇っているのに、なぜ幸せだと感じる人が少ないのでしょう？あなたはどう思いますか」と。私は咄嗟に答えた。「ものに満ち溢れて埋もれてしまっているからじゃないですか」と。そのとき私の脳裡をよぎったのは、紛れもなくモンゴルで暮らしたあの2週間のことである。物質的豊かさが、必ずしも社会や人間の豊かさを意味するわけではない。本当の豊かさとは何か。その問い合わせがかりは、間違いなく人間そのものの裡に隠れているのであろう。周りの環境を観察し、洞察力を培うこと。これは人間社会や人間関係においても通用する力である。だが忘れてはいけないのは、ただ周りの状況を察知してそれに迎合するのではなくて、自分自身で判断を下すことだ。観察する身体と、判断を下す思考と。そして己の「軸」を培っていくこと。それは、日々の生活から学ぶことに他ならない。複雑化と多様化を極めていくこの動乱の世の中で、私はどう生きていきたいのか。どう在りたいのか。これは常に問いかなければならぬことだろう。でも日常に忙殺されるあまり、思考すること、心を動かすことを押し殺して忘れていた自分がいた。その心の鮮やかな動きを取り戻してくれたのは、モンゴルでの数々の出会いと、悠久の時を流れる自然の美しさである。最後に、このような素晴らしい機会を与えてくださった今岡良子先生、モンゴルでお世話になった方々、そしてモンゴルの地に、深く感謝申し上げる。

(そう よしこ)

《雑 感》

チョコレート包装のイラストに見る「モンゴル意識」

三上 喜美男

モンゴルみやげにお薦めしたいのが「ゴールデンゴビ」のチョコレートだ。一昨年、ウランバートルなどを訪ねた帰りにモンゴル在住の編集記者・近彩さんに袋詰めをいただき、さらに空港で24個入りの箱詰めを買い求めた¹⁾。ベルギーの技術を導入したというミルクチョコレートは、日本製と比べても遜色なくおいしい。あちこちで配ったら好評だった。

「推し」の理由はおいしさだけではない。一口サイズのチョコの包装が楽しい。モンゴルの民族衣装がカラフルなイラストで紹介されているのだ。それも「モンゴル」を構成する12のエスニック・グループ²⁾(文化や歴史を共有する人々の集団)の名称付き³⁾で(写真)。一つ一つの異なる図柄から文化の多様性が学べる。



-
- 1) 製造販売元“Golden Gobi”的ホームページ(<https://goldengobi.mn>)によると製品名は《ЭСГИЙ ТУУРГАТАН》で16500トゥグルク。通販でも購入できる。
 - 2) 「民族」の下位分類は「部族」が一般的だが、英語 “tribe” のように「未開」の集団に対する差別的な表現ともされる。国立民族学博物館編「世界民族百科事典」では「エスニック・グループ」を代替表現としており、本稿はそれにならう(12P「エスニシティ」の項目)。
 - 3) チョコの包装にある12のエスニック・グループは次の通り。“TORGUUD”, “MYANGAD”, “BURIYAD”, “URIANKHAI”, “UULD”, “KHALKH”, “ZAKHCHIN”, “KAZAH”, “DURVUD”, “BAYAD”, “UZEMCHIN”, “BARGA”。なおモンゴル国の大学生たちがエスニック・グループにどんな意識を持っているか、現地の大学で教える近さんに尋ねてもらった。日を改めてその内容を検討したい。

モンゴル国のマジョリティ集団は「ハルハ」で、包装には「KHALKH」とローマ字表記されている。ただしチョコの箱では12グループの一つに過ぎない。国内だけでなく中国内モンゴル自治区の「ウジムチン(UZEMCHIN)」や「バルガ(BARGA)」、ロシアのブリヤート自治共和国を構成する「ブリヤート(BURIAD)」なども同等に紹介されている。

チョコの箱を一覧すれば、モンゴル系の民族が国境を超えて各地に存在していることが分かる。それぞれのイラストが「モンゴルとは自分たちのことだ」と胸を張っているようである。モンゴルの子どもたちがこのチョコパッケージを手にすれば、国境外にも自分たちの同胞、仲間がいるのだと心に刻むかもしれない。

その一つ、「ウリヤンハイ(URIANKHAI)」はモンゴル国北に隣接するロシア・トゥバ共和国の主要民族トゥバ人を含む。トゥバ語はチュルク系の言語だが、モンゴル国にも住んでいるからか、同じく国内のチュルク系「カザフ(KAZAH)」とともにパッケージの仲間に入っている。ユーラシアの草原で文化と歴史を共有してきた関係性が、言語や血統などを超えた「モンゴル」という紐帯意識となっているのだろうか。「ウリヤンハイ」や「カザフ」の人たちがどう受け止めるかも知りたいところだ。

目を引いたのは「トルグート(TORGUUD)」である。オイラート系のエスニック・グループで、モンゴル版ウィキペディアには「ロシア連邦のカルムイク共和国、中華人民共和国の新疆ウイグル自治区、甘肃省、内モンゴル自治区アラシャー盟エズニー旗、モンゴル国ホブド県ボルガン村に居住する(Торгуудууд одоо үед ОХУ-ын Бүгд Найрамдах Халимаг Улс, БНХАУ-ын Шинжаан-Уйгурин Өөртөө Засах Орон, Ганьсу муж, БНХАУ-ын Өвөр Монголын Өөртөө Засах Орны Алаша аймгийн Эзнээ хошуу, Монгол улсын Ховд аймгийн Булган суманд оршин суудаг)」⁴⁾とある。

カルムイク共和国はカスピ海沿岸にあるロシア内の自治共和国で、「トルグート」系のカルムイク人が人口の多数を占める。17世紀にモンゴルの西方から移り住み、ウラル山脈以西、ロシアのヨーロッパ地域にとどまって居住する。チョコに「カルムイク」の表記はなかったが、「トルグート」がその存在を伝えているとも言える。

はるか遠い地に暮らす「同胞」「同族」の存在も、モンゴル国に住む人々の意識の中にある。そのことを12個の小さなチョコの包みは教えてくれるように思える。

ロシアのウクライナ侵攻開始から約半年後の2022年9月23日、エルベグドルジ元モンゴル大統領がSNSのユーチューブで英語のビデオメッセージを公表した(末尾にユーチューブHPから取った英語全文)。メッセージは「世界モンゴル連盟理事長」の立場でなされ、ロシアのプーチン大統領に対する停戦の呼び掛けとともに、ロシア国内の少数民族ブリヤート、トゥバ、カルムイクの「モンゴル人」にも寄せられた⁵⁾。

エルベグドルジ氏は面識のあるプーチン氏に対して「無慈悲な殺りくと破壊をやめるよう」強く迫った。モンゴルは旧ソ連の時代からロシアとは同盟関係にある。そのモンゴルの大統領経験者としては、極めてストレートな、異例の声明と言える。

特筆すべきは、兵役を回避するためロシアから逃れようとする人々に対して「世界が両手を開き、心を込めて迎え入れる」と語り掛けたことだ。

4) <https://mn.wikipedia.org/wiki/Торгүүд>

5) <https://www.youtube.com/watch?v=q2qDzicmvxM>

ロシアでは非ロシア系民族が多く戦地に動員されているとされる⁶⁾。エルベグドルジ氏は、モンゴル系を含む少数民族が「最も苦難を被っている」と指摘した。さらにブリヤートやトウバ、カルムイクの「モンゴル人」が「多大な苦難を被り」「戦闘の消耗品(cannon fodder =火砲の餌食)として扱われてきた」と懸念を示し、「何百人も負傷し、何千人も命を落としている」という危機的な状況にも言及した。

そうした切迫した事態を受けて「私たち(モンゴル国の)モンゴル人もまた(世界と同じく)両手を開き、心を込めて(モンゴル人を)受け入れる」と明言したのである。

報道によればロシアからはロシア系を含む多くの若者が徴兵などを忌避してジョージアなど隣国に逃れている⁷⁾。モンゴル国にもブリヤート、トウバ共和国から越境するモンゴル系の若者が絶えないという。モンゴル国の市民の支援を受けて今後の身の振り方を模索する姿が、日本でもドキュメンタリー番組で報道された(「国民と国家 ある日 戦争が始まつたらー」中京テレビ制作)⁸⁾。取材したのは中京テレビで記者を務めるモンゴル人のゾーラ(オユーンチメグ・ホンゴルズル)氏である。

カルムイクからの越境者については、近彩さん発行の情報誌「今日のモンゴル コンバイノー」20号(2022年発行)でも「命がけの脱出7000⁹⁾！」などの見出しとともに報告されている。バスと鉄道を乗り継いでモンゴル国内に身を寄せた男性7人に、近さんは偶然出会った。話を聞くと、全員が「行ける所へ行くしかない」と着の身着のままで国を出て、一部の人は家族を残しての、まさに命がけの「エクソダス(脱出)」だったという⁹⁾。

モンゴル政府はこれらモンゴル系の人々の受け入れに関して公式な見解を表明していない。ウクライナ侵攻を継続する隣の大ロシアへの配慮か、表だった動きを控えているように見える。むしろロシアが兵役逃れへの締め付けを強めれば、モンゴルなど近隣諸国も入国管理強化を余儀なくされる可能性がある。

文化やルーツを共有する「同胞」に心を寄せて親しみを抱く。それは人間が自然に抱く心情と言える。ただ同族意識には「他者」との違いを強調する側面があり、緊張が高まれば民族の連帯意識が現状変更を目指す政治的な動きとして、影を落としかねない「危うさ」をはらむ¹⁰⁾。多くの民族が国境に分断された形で存在する複雑な国際社会の現実を、冷静に見詰める目を持つべきかもしれない。

2025年の旧正月、モンゴル国を訪問した友人の写真家・後藤剛氏に依頼して民族衣装のチョコの箱詰めを新たに買って来もらった。12種類のイラストに包まれたチョコが変わらず箱の中に並んでいた。モンゴル国だけ見ても民族文化は実に多様で、まだ描かれていないエスニック・グループもあるはずだ。無邪気なイラストが独立国・モンゴルに暮らす現代の「モンゴル意識」を反映しているとすれば、イラストの種類がもっと増えたらいい。そんなことを考えながら、にぎやかなパッケージを想像してみた。

6) 例えば東京新聞「ウクライナ侵攻でロシア側戦死者に少数民族が目立つのはなぜなのか 現地で実感した連邦支配のいびつき」<https://www.tokyo-np.co.jp/article/205896>

7) 例えば日本経済新聞「動員令でロシア混乱 若者ら出国相次ぐ、政権不満も」<https://www.tokyo-np.co.jp/article/205896>

8) 初回放送は2023年4月15日。https://www.youtube.com/watch?v=AiMe5z7_4Ms

9) 「コンバイノー」20号の記事によると、7人はカザフスタンを目指したが、国境検問所の長蛇の車列を見て断念し、ウランバートルに目的地を変えた。5人はさらに第三国への出国を目指し、2人は「いずれ帰国する」と語った。「危険」を理由に写真撮影は拒否したという。

10) 民族意識は共有する文化などが「われわれ」を定義する線引きの基準として働くが、同時に他の人々=「彼ら」と比べてどこが違うかというネガティブな面を際立たせる。「他の民族を排除する象徴として文化が用いられる」危険性がある(「世界民族百科事典」22、23P「民族と文化」の項目)。支持を集め、「日本人ファースト」の言説が排外主義をかき立てる「負の側面」に、私たち自身も留意したい。

ただし民族意識の発揚は、たとえ素朴な次元の表明であっても光の部分ばかりでないことを銘記する必要があるだろう。甘いミルクチョコが苦く感じる事態はあってほしくないし、避けねばならない。とりわけ今日のような、きなくさい国際情勢下では。

《エルベグドルジ元モンゴル大統領英語メッセージ全文》

Message from Elbegdorj Tsakhia, President of the World Mongol Federation

Good Morning, Good Day, and Good Evening to all my friends who are watching me and listening to me. I am one of the eight sons of herdsmen. I am one of you, who dearly loves freedom and peace. I am one of the proud citizens of a free and independent Mongolia.

I have a simple message to President Putin: “Mr. President stop the war. Прекратите войну. I met with you on many occasions. You have the power to stop this war right now. Now it's time to make peace. My heart is breaking apart when I see Russia. Since you started this war Russia has been drowned in fears, full of tears. Your mobilization brings oceans of suffering. Mr. President, stop your senseless killings and destruction.”

I have a message for those who are fleeing Russia. The World will meet you with open arms and hearts. Today you are fleeing brutality, cruelty, and likely death. Tomorrow you will start

freeing your country from dictatorship. I know since the start of this bloody war, ethnic minorities who live in Russia suffered the most. The Buryat Mongols, Tuva Mongols, and Kalmyk Mongols have suffered a lot. They have been used as nothing more than cannon fodder. Hundreds of them are wounded. Thousands of them have been killed. We the Mongols will meet you with open arms and hearts as well.

I also have a message to those being forced to fight Putin's war in Ukraine. Don't shoot Ukrainians. Don't shoot your sisters and brothers, children and elders. Do not kill that country. Do not kill their freedom. Ukraine has a full right to exist.

Finally, I have a message to the brave people of Ukraine and to President Zelensky. Thank you for your bravery and leadership. The best side of the world is with you. You are an inspiration. When you win, all people will win. No dictatorship lasts forever. The united will of people's freedom will always prevail.

Slava Heroyam

Ulaanbaatar, Mongolia

2022.09.23

(quoted from Youtube)

(みかみ きみお)

《活動報告》

活動報告 (2025年)

今岡 良子
内田 敦之

月例会について

月例会は院生の発表が中心となり、東京都や千葉県から発表する院生もいるため、リモートを使っての発表が続いた。文学部の曾芳子が、共通教育の今岡担当の授業で「四季 遊牧—ツェルゲルの人々」の映画を見て、今岡とともにツェルゲルを訪問した。9月の例会で報告したが、月例会で学生が報告するのは久しぶりである。

(敬称略)

3月例会	3月 1日 19:00~	Zoom Meetings	M. ムンフゾル	「外交関係樹立以前の日本とモンゴルの民間交流—1966年の墓参を手がかりとして」
	3月 29日 19:00~	Zoom Meetings	執筆者	『モンゴル研究』33号の合評会
7月例会	7月 5日 19:00~	Zoom Meetings	アリヨーナ・バトエワ	「境界を越えて——ハンダスレン女史の回想録に見るモンゴルの歴史と家族の記憶」
	7月 12日 19:00~	Zoom Meetings	サインホビト	「中国におけるモンゴルの拝火信仰の文献リスト」
8月例会	8月 1日 18:00~	Zoom Meetings	チャオバオ	「内モンゴルにおけるアグリツーリズムの可能性—オルドス市ウーシン旗無定河鎮を事例として」
	8月 8日 18:00~	zoom と 対面	賀 志超	「中国内モンゴル自治区テメゲジ自然保護区における鳥類多様性と文化多様性の共生について」
9月例会	9月 20日 19:00~	Zoom Meetings	曾 芳子 今岡良子	「2025年のツェルゲル、地域からの地域研究の胎動—設立100周年を迎えたバヤンホンゴル県ボグド郡を2度訪問して—」
11月例会	11月 9日 19:00~	Zoom Meetings	サインホビト	「拝火祭祀書の比較研究—エジナ書とその他のラクダの招福書」
	11月 28日 19:00~	Zoom Meetings	サラントヤー	「清末における内モンゴル女子学生の留日体験について」

2024年3月に「モンゴル現代女性解放史研究会」が発足し、リモートで、不定期に開催し、上野千鶴子の『家父長制と資本制—マルクス主義フェミニズムの地平—』や岡野八代の『ケアの倫理と平和の構想』を読んだ。マルクス主義フェミニズムの第一人者と言えるアレキサン德拉・コロンタイは、人類史上初の女性の大臣であり、彼女の母性と子を保護する政策は、モンゴル人民共和国ではもちろん導入され、日本でも下敷きとして利用してきた。にもかかわらず、ほとんどのモンゴル人は知らず(知らされず)にいたことが、非常に興味深い。マルクス主義フェミニズムの視点からモンゴルの女性解放政策を問い合わせことで、歴史のフレームを一つ壊し、一つ加え、新しい窓が増える予感があるので、続けていきたい。

2024年、2025年は、モンゴル国で何10周年記念、100周年記念の行事が盛んに祝われ、学術会

議が開かれたり、さまざまな本が出版され、**номын баяр**（出版記念会）で紹介されたりした。

モンゴルの写真家協会設立90周年記念の行事の中で、10月8日に「モンゴルの写真撮影の始まり、その発展の90年の歴史」というテーマの国際学術学会が開催され、今岡良子が1990年代のゴビプロジェクトの写真資料と遊牧民からの聞き取り内容を紹介し

‘МОНГОЛЫН ХӨДӨӨ - 1990-ээд ОН: “Говь төсөл”-ийн судалгаанаас харахад’

「1990年代のモンゴルの地方—ゴビプロジェクトの調査資料より」という報告を行った。90年代は、モンゴルの人々にとっても、懐かしい過去になっている。



モンゴル国立大学のモンゴル語、言語学研究専攻が設立されて、80年となり、11月29日に開かれる「モンゴル語学研究-2025」国際学術会議に荒井幸康が「カルムイク語の第2音節以降の母音はなぜ書かれないのか」というテーマで発表した。



新しい動きとしては、荒井幸康が、10月から大阪大学人文学研究科に着任し、専任教員として外国語学部モンゴル語専攻の学生の教育を担うことになった。これからは言語学の研究会も盛んになっていきそうである。

(今岡良子)

水曜例会「モンゴル秘史を読む」について

(敬称略)

日 時	形 態	企 画	内 容(担当者)
1月 8日 19:00~	Zoom Meetings	内田	§ 129～130(内田)
2月 12日 19:00~	Zoom Meetings	内田	§ 131～132(賀 志超)
3月 12日 20:00~	Zoom Meetings	内田	§ 133～134(サインホビト)
4月 16日 19:00~	Zoom Meetings	内田	§ 135～136(サインホビト)
5月 14日 20:00~	Zoom Meetings	内田	§ 137～138(内田)
6月 11日 20:00~	Zoom Meetings	内田	§ 139～140(サインホビト)
7月 9日 20:00~	Zoom Meetings	内田	§ 141～142(サインホビト)
8月 13日 20:00~	Zoom Meetings	内田	§ 143～144(内田)
9月 10日 20:00~	Zoom Meetings	内田	§ 145(サインホビト)
10月 8日 20:00~	Zoom Meetings	内田	§ 146(チョモルリグ)
11月 12日 20:00~	Zoom Meetings	内田	§ 147(サインホビト)
12月 10日 20:00~	Zoom Meetings	内田	§ 148～149(サインホビト)

2020年10月に始まったこの例会も今年で丸5年が過ぎた。昨夏より月1回、第二水曜日の19時から開催してきたが、今年2月以降は内田の仕事の都合で20時始まりとした。今年は巻四129節から読み始めて巻四を読み終え、巻五149節まで進んだ。この5年余りで全体の三分の一ほどを読み進めたことになる。

今年度は、松田孝一先生、荒井幸康先生、サインホビトさんには積極的にご参加いただいた。最近の参加者は、上記3人に内田を加えた4人で固定化しつつある。少人数にはなっているが、今年度は一回も休会することなく継続できた。

松田先生からは歴史学からのコメント、関係論文・資料の惜しみない紹介・ご提供をいただき、荒井先生からは言語学、また、ブリヤート方言・オイラート方言との比較からコメントをいただいている。秘史の難解な古語や古い表現、歴史的背景などを理解するのに大変貴重な助言である。また、サインホビトさんにはレジュメ担当を数多く引き受けていただいた。ここで改めて皆さんに感謝したい。

課題としては、各会で共有された貴重な意見や議論の要点を内田が整理していた「読む会ノート」が今年度は一度も出せなかった。来年度は可能な限り整理して、共有できるよう精進したい。

また、秘史研究の膨大な成果の一部をこの間収集してきた。貴重な資料を参加者と共有できるようにしていきたい。

(内田敦之)

編 集 後 記

- ◇「モンゴル研究」創刊は1975年。創刊50周年ということになります。芝山氏の文章を読むと、本誌を生み出した学生たちの熱気が伝わってきます。半世紀の間に、多くのことが大きく変化しました。山あり谷ありでしたが、50年を生き抜いて34号をお届けすることができました。当時の若者も、その後の若者も、これからの方も、会に集い、自由に議論し、刺激を受けて、発表できる場です。論文だけではない在野の研究誌であり続けたいと思います。
- ◇昨年ホブドを旅行し、アラク山の丘から周囲を見回したとき、ツアンバガラブ山麓でそれはそれは大きな北斗七星を目にしたとき、地球という天体の上で生きているのだと実感しました。出アフリカ後あちこちに移り住んだ人類は、言葉を大切にそれぞれの大地に適応して生きてきた。情報だけではなく心も伝え合い、物語や伝説を紡ぎ、生活だけではなく心の世界も豊かにしてきた。大地と言葉と人が生む個性。世界中で都会に住む人が増え、新自由主義的グローバリズムの中、大地を離れ抽象化する生活の中でも、言葉の豊かさが支えになり、新しい物語を紡いでいるのではないかでしょうか。ツエルゲルの調査報告、旅行記。ナツアックドルジの訳詩、「手なし娘」、楽しみ味わってください。
- ◇チョコレートの包み紙から始まるエッセーも考えさせてくれます。お楽しみください。
- ◇論文がいくつか取り下げられました。次号での掲載を楽しみにしています。
- ◇今年、CiNiiだけではなく、大阪大学学術情報庫 OUKAにも登録されました。そちらでも検索できます。
- ◇さて、次号の編集長は誰？

(吉本周平)

『モンゴル研究』第34号

2025年12月26日発行 定価500円

編集・発行 モンゴル研究会

〒562-8678 箕面市船場東三丁目5番10号
大阪大学 人文学研究科・外国語学部 今岡良子研究室 気付
モンゴル研究会 HP: <http://mongolkenkyukai.jp/>
e-mail: mail@mongolkenkyukai.jp

MONGOL-KENKYŪKAI (the Society of Mongolian Studies, Founded in 1970)

c/o Imaoka's office, Graduate School of Humanities, School of Foreign
Studies, The University of Osaka 3-5-10 Senba Higashi, Mino city, Osaka
pref., 562-8678, Japan

MONGOL-KENKYŪ

Journal of Mongolian Studies

No.34

CONTENTS

Dec. 2025

Fieldwork Report

Tselger in 2025

- Local Residents Have Begun Local Research – *Ryoko IMAOKA*..... 1

Commemorating the 50th anniversary of MONGOL KENKYU

100 Years of Modern Mongolian Literature and 50 Years of Mongolian Literature Studies in Japan
Journey, Current Status, Crisis, and New Path *Yutaka SIBAYAMA*.....25

Translations

- D. Natsagdorj "Wind,wind" *Sachihiko ODA*.....44
D. Natsagdorj "Pioneer Song" *Sachihiko ODA*.....45
D. Natsagdorj "Mother" *Sachihiko ODA*.....47
"The Maiden Without Hands" : A Mongolian Folktale *Ruriko YOSHIMOTO*.....48

Essay

- My Little Journey in Mongolia *Yoshiko So*.....51
"Mongolian identity" in Chocolate Packaging Illustrations *Kimio MIKAMI*.....58

Activity Report

- Activity Report 2025 *Ryoko IMAOKA • Toshiyuki UCHIDA*.....62

Edited by

MONGOL-KENKYŪKAI

Osaka Japan